

ユニテ

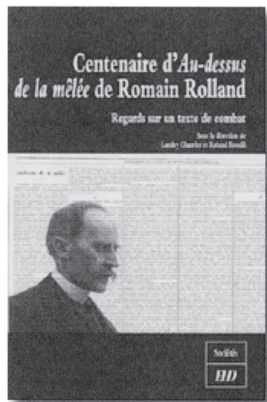
2016. 4

43

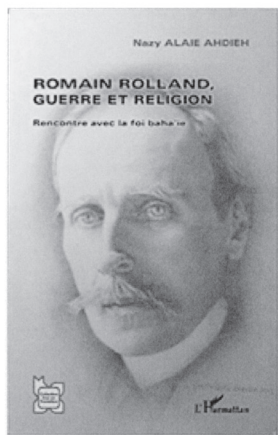


一般財団法人
ロマン・ロラン研究所

2015年 フランスでの新刊書から



Centenaire d'Au-dessus de la mêlée de Romain Rolland
Regards sur un texte de combat
Ed. Universitaires de Dijon, sept. 2015



Romain Rolland, Guerre et Religion
Rencontre avec la foi baha'ie
par Nazy Alaïe Ahdieh
Ed. de l'Harmattan, mai 2015



Romain Rolland - Stefan Zweig
Correspondance 1920-1927
Edition établie, présentée et annotée
par Jean-Yves Brancy.
Traduction des lettres en allemand
par Siegrun Barat.
Albin Michel, Paris, sept. 2015

Études Romain Rolland - Cahiers de Brèves n° 36 - décembre 2015

表紙 1938年から1944年12月30日の死まで、ロマン・ロランが暮らした
ヴェズレーの家の前にあるプレート

ディディエ・シツシュ
シツシュ 由紀子 訳
…… 1

ロマン・ロラン研究所便り

短信	64
訃報・寄贈	65
研究所設立趣意書	66
研究所の活動	67
二〇一五年度 賛助会員、寄付者名簿 寄贈図書	74
編集後記・読書会報告	75

Romain Rolland, confident et témoin

Quelques réflexions sur le <i>Journal de Vézelay</i> (1938-1944)	1
Didier Chiche	

ロマン・ロラン（聞き手として、証人として）

『ヴェズレー日記（一九三八―一九四四）』をめぐる考察

ディディエ・シッシユ

シッシユ 由紀子 訳

ロマン・ロランは、一八八二年から日記をつけ始めた。一九五〇年に、ロランの妹と未亡人が、それをフランス国立図書館に寄贈する。その後、彼の日記は断片的に公開されてきた（例えば、『戦時下の日記（一九一四―一九一九年）』）。そして、二〇一二年、ようやく、一九三八年から一九四四年の間（ロランが亡くなったのは一九四四年二月三〇日）に綴られた日記が、『ヴェズレー日記（一九三八―一九四四）』と題され、バルティヤ社から刊行された。マリー＝ロール・ブレヴォー女史の協力を得て、ジャン・ラコストが編纂にあたっている。解説と注釈に加えて索引も付けられた素晴らしい内容は、示唆に富み、従来のロマン・ロランのイメージを一層豊かにしている。このラコスト編を参考に（特に括弧で示した注釈について）、ロランの日記をめぐる考察を試みてみたい。

日記の文章そのものには統一性はない。首尾一貫性のない走り書きがある一方で、構成のしっかりした長い文章もある。

この日記が持つ意義は、ロマン・ロランが、二〇世紀のヨーロッパ史上における最も劇的な出来事に立ち会いながら、時には深く参画し、時には距離を置いた傍観者であったことを裏付けていることだろう。

一九三八年、ロランは七二歳になっていたが、スイスを離れ故郷のブルゴーニュのヴェズレーに移る。彼は、なぜ、

スイスを離れたのか？ 常に左派の偉大な知識人だった彼は、ファシズムにおびやかされた祖国が彼を必要としてい
ると感じたのかも知れない。一九三七年、片山敏彦への手紙にこう書いている「私の居場所は「人民戦線」のフラン
スにあります。フランスが危機に瀕していると思えば尚更です」（二頁。以下『ヴェズレー日記』の頁数をしめす）。彼
が最終的にヴェズレーの地を選んだのは、ここが出生の地クラムシーに近く、大きな精神的意味を持った場所だった
からだろう。片山には「全てのフランス人にとって、神聖なるこの丘」とも書いている（二二頁）。ヴェズレーのサン
ト＝マドレーヌ大聖堂は、マグダラのマリアを祀り、クレルヴォーのベルナルドゥス（二世紀の神学者）が、第二回
十字軍への勧誘演説をした（二三頁）場所としても知られる。

さて、前述の左派の知識人という名称だが、ここで、その意味をはっきりさせておこう。知識人とは、一体、何
か？ この言葉は、ドレフュス事件以来使われるようになった。作家・芸術家やそれらの分野にかかわる人々が、自
らの生業を中断して、高尚な道德的規範を守るために政治の場に降りてきたのだ。「知識人」を指す言葉には、
「*clerc*」もある。古くは聖職者を指す言葉だったが、これには理由がある。「知識人」とは、「ライシテ」つまり、政教
分離に基づく良心の導き手としての作家であり芸術家たちのことであり、社会に参画する人々を指している。それぞ
れの芸術的創作と並行して参画したり、創作そのものを通して参画するのだ。それはまさに、ロマン・ロランが、作
家として生涯にわたって果たしたことだった。

一九三〇年代は、脅威が高まった（四〇年代の悲劇の序幕であった）。ドイツではナチス政権が樹立し、ナチスドイツ
とファシスタ党政権率いるイタリアは同盟を結び、ナチスドイツの実力行使による勢力拡大で、ヴェルサイユ条約体
制の崩壊（オーストリア併合・チェコスロバキア解体）が始まる。スペイン内戦（一九三六―一九三九）の結果、スペイン
にもファシスト体制が敷かれる。その結果、フランスはファシスト勢力に包囲されることになった。おまけに、国内
の世論には、ファシズムに多かれ少なかれ傾倒しながら、反共和国を唱える動きが始め、こう言った勢力は、

一九四〇年にフランスがドイツに敗北すると、ヴィシー政権樹立に加担して行くことになる。ロマン・ロランにとって、この時期は試練の時となった。ヴィシー政権は、ナチスドイツとの協力政策をとっていく。ナチス体制を激しく嫌悪し、また、ずっとドイツとフランスの相互理解を信じ、一つのヨーロッパという理想をもっていたロランにとっては耐え難いことだった。

年老いてもなお、左派の偉大な良心であり続けるロランが、いかにこのような出来事に反応していくかを追うことは、興味深いことだ。はっきりとはわからない理由で（慎重さからか、居心地の悪さからか）、ロランは、前面には出て来ない。しかし、公開を前提としていない日記の中で、彼は、はっきりと、検閲を恐れることもなく持論を展開している。

重要なのは、この日記を読むことで、ロマン・ロランの「知られざる一面」を垣間みるということができるということだ。第一次大戦中に『戦いを超えて』を著したことで、ロランは典型的な反戦・平和主義の知識人と認知されてきた。ところが、歴史的に全く異なる文脈に置かれたことで、何が何でも反戦・平和主義を貫いたわけではないことがわかり、国際情勢の変化や戦争そのものの性格の変化に応じて、ロランが、時として、意外なスタンスをとっていた様子がわかる。

一 聞き役の孤独

ロマン・ロランは、左派知識人の良心と見なされていた。彼自身も共産党を標榜するが、彼のオーラは共産主義者たちの輪を超えている。あらゆる政治的信条を持つ人々が彼を引き合いに出し、多くの人々がヴェズレーを尋ねて来た。彼がパリに赴くこともあり、日記には多くの訪問や会談の内容が記されている。高齢のせいか、解放感を感じていたようで、他の人にはできないほど自由な言葉を用いている。

とは言え、彼が綴った様々な会談の記録には、孤独感が感じられる。それこそがパラドックスだと言えるだろう。つまり、ロランは、取り巻きも多く、相談にやって来る人も多いにもかかわらず、結局のところ、いつも孤独なのだ。なぜなら、信奉者の中には、もはや彼の思想を理解できない人もいたからだ。例えば、反戦・平和主義者たちの中には、その主張ゆえに、対独協力を受け入れて行く人も出ていた。共産党員たちはどうかと言えば、彼らの政治的なもくろみは、ソ連支持以外の何ものでもなかった。

まず、反戦・平和主義者たちとの関係から詳しく見ていこう。第一次世界大戦以来、ヨーロッパの自殺行為とも言える殺戮の前に、一九一四年に『戦いを超えて』を著したロランは「反戦・平和主義者」の代名詞となる。しかし、三〇年代に入って、ヨーロッパでのナチズムの拡大に致命的な脅威を見て取ったロランは、ヒットラーを前にしては和平を訴えてはいけな、毅然とした態度を取るべきだという結論に至る。一九三八年九月は重要な時期だ。ヒットラーがチェコスロバキアに侵攻し、ヨーロッパは開戦か戦争回避かの瀬戸際に立たされる。周知の通り、フランスのダラディエ首相とイギリスのチェンバレン首相は、前々から、対独宥和政策を唱えており、ヒットラーとミュンヘン協定を結ぶ。これは事実上の降伏だった。ロランを好んで引き合いに出して来た強硬な反戦・平和主義者たちは、これを支持する。しかし、ロランは同調しなかった。ロランはヒットラーの狂気を見逃さず、彼のことをベルヒテスガーデンの狂人と呼んだ（九二頁）。「世界の平和も破壊も、あの気のふれた男の手に委ねられている。あの男は、すっかり「運命の人」気取りだ」（九八頁）。

ロマン・ロランは、平和至上主義の名においてヒットラーに屈してはならないと考えていた。彼は明晰にも、ミュンヘン協定がもたらす平和は偽物だと言う（二二〇頁）。この発言で、ロランは、彼が完全平和主義者と呼ぶ人たち（九六頁）と袂を分かつことになった。その中に、ジョルジュ・ピオッシュがいた。ロランは彼のことを以前の友人と呼んでいるが（九六頁）、ジョルジュ・ピオッシュが反戦新聞『一徹な人々（*L'Intransigeant*）』に書いたことを、ロラン

は日記に引用している（一九三八年九月）。

「ロマン・ロランは、自分が徴兵年齢を超えてから、嬉々として「対立」を煽っている」（九七頁）。ピオツシユは反戦主義を貫いた挙げ句、一九四〇年以降は対独協力推進を唱えていく。ロマン・ロランは、自分と反戦・平和主義者たちとの違いを明確に理解し、説明している。

「結局のところ、彼ら（彼らの中でも誠実な人々）と我々との間には、平和を守るための最良の方法は何かという点で、判断が分かれているだけだ。我々は、ヒットラーを前に、尊厳ある毅然とした態度だけが平和を守ることができると確信している。彼らは譲歩に譲歩を重ねるべきだと考えている。私に言わせれば、彼らは恐ろしい思い違いをしている。しかし、だからと言って、互いにのしり合う理由はない。私は常に自制して来た。どんな狂気に取り憑かれたら、手のひらを返したように、古き友人たちを侮辱し、引き裂くことができるのか！ 未来が我々を裁くだろう！」（九七頁）。

この記述には、ロランの苦渋の様子が感じられる。なんとしても反戦・平和を貫こうとする人たちは、ロランを理解できず、今や侮辱することも憚らなくなっていたのだ。その後の歴史を見れば、ロランが正しかったことがわかる。一九三九年九月の開戦時、ロランはこう書いている、「今や選択の余地がないことは明白だ。ヒットラーを粉砕しナチス政権をドイツから根こそぎにすることなくして、ヨーロッパに再び平和が訪れることはないだろう」（一九三九年九月二日、二五七頁）。

反戦・平和を唱える作家には、ジョン・ジオノとアランがいた。

まず、ジョン・ジオノは、プロヴァンスの地方色豊かな作風で知られる大作家で、一九三八年に、ロランのことを侮辱するように亡きロマン・ロランと呼んだ。これを知ったロランは、こう書いている、「ジョン・ジオノは無礼にも私を侮辱した」（三三七頁）。そして、ロランは、彼の無邪気な言動を嘆かわしいと批判する。「ジオノのような人間

は、ヒットラーが何の抵抗にも遭わずにフランスを占領できれば、戦いを放棄した自分たちが救われるとも思っているのか。だとしたら大間違いだ。反戦主義者として、ヒットラーに憎まれ、追撃されているのは、共産主義者と同様だ」(一九三八年九月一八日、一〇二—一〇三頁)。その後、ジオノがヴィシー・ドイツ傀儡政権支持に回ったことは、周知の事実だ。

ジオノ側にはアランもいた。ロランはこう書いている。「ジオノやアランのような「完全反戦・平和主義者たち」(…)ポール・ニザンの言う「恐れを吹き込む者たち」よ。彼らは、知らぬ間に、ドイツとイタリアのファシストたちの威嚇に資してしまったのだ」(一九三八年十一月、一三二頁)。

「かれこれ二〇年、私は、右派や極右(アクション・フランセーズ)の激しい攻撃に晒されてきたが、この二年間、気がつけば、反戦・平和主義者たち・レジスタンス不参加者たち・フランスのガンディー主義者たち(気の毒なガンディー!)から、それに勝るとも劣らない憎悪と侮辱と悪意を受けている」(一九三八年十一月、一三七頁)。

この辺りの記述には、非常に今日性がある。二〇一五年にパリで起きた襲撃事件の文脈で考えてみよう。我々の死を願う敵が目の前にいて、その倒錯した悪意が明白である時、我々はどうしたいのだろうか。平和を唱え続けるのか? または、敵をその名前で呼ぶべき時が、ついに来たのか? 敵を名前で特定した後は、その壊滅に向けてあらゆる手段を尽くすべきなのか? ヒットラー打倒の必要性は、ロマン・ロランにとっては明白なことだった。彼は一九四〇年四月三〇日に、こう書いている、「ヒットラー、私は、この人物への敵意と彼を倒す必要性を表明してきた」(三九三頁)と。

ロマン・ロランといわゆる完全反戦・平和主義者たちとの確執を理解するのは簡単だ。帝国列強による領土拡大・利権獲得が目的の戦争を前にして、ロランはその愚かさを見抜き、反戦を訴えた。第一次世界大戦がその例だ。ところが、国の基本的原理が危ぶまれる場合、戦争は時に避けられず、平和至上主義を唱えることはできなくなる。

次に共産党員たちとの関係はどうだろう。一九三〇年代、ロランは、共産党の「道連れ」とも呼べる存在になっていた。ロランはソ連を積極的に支持し、一九三五年には『革命を通して、平和を』という題の文章を書いている。

「我々は、ソ連が、過去一〇年にわたり、壮大な痛みを伴う社会的実験を実行してきたことを評価している。それが成功するかどうかは、まだ未知数である。しかし、それは、ヨーロッパ旧大陸において、新しい世界を創造するためのたった一つの試みである」。

周知のことだが、ロランはソ連に出向きスターリンと会談する。もっとも、それをきっかけに、彼はスターリン主義の中味を目の当たりにすることになるのだ。

ここから、ロランとフランス共産党との繋がりができる。フランス共産党の存在理由は、一九二〇年のトゥール会議当初から、ソ連を支持することだった。

ロランは、こうしてヴェズレーの地に共産党の要人を迎える。一九三八年八月五日には、モリス・トレーズが来る。彼は、一九三〇年以來、共産党党首だった。「特に、トレーズは好人物だ。少年が急いで大人になったような彼の大きな顔は、八月の太陽のように紅い」（六七頁）。または、アラゴンのような知識人も来る。

大詩人アラゴンは、シュールレアリスムから共産主義へ転向する。二人は一九三八年七月にヴェズレーで会い（五六頁）、同じ年の十月にパリで再会している（二三〇頁）。また、ジャン＝リシャール・ブロックは、一九三八年にロランに手紙を書き、一〇月一三日にヴェズレーを訪れ、翌年七月に再会している（二三二頁）。この二人については、後ほど詳しく述べよう。

さて、そこには問題があった。左派、と言うより、共産党左派は、三〇年代終盤から四〇年代にかけて、党の方針が定まらぬことに悩まされていた。なぜか？ 共産党は当初よりソ連への連帯を表明していた。ファシズム（全体主義）に対抗するためにはソ連が最も有効な砦だと信じていたからだ。ところが、スターリンの狡猾でマキャベリ主義

的な政策に、だんだんと違和感を持つようになっていたのだ。一九三八年九月一日、ヴェズレーにレオン・ムーシナックがやって来る。彼は共産党員で、共産党機関紙『ユマニテ』の映画評論を担当するジャーナリストだった。ロランは、はつきりと、ファシズムと戦うことは共通の大義だと述べ（九五頁）、数ページ先には「ソ連の敵たちは、ソ連崩壊のためなら、ヒットラーやムツソリーニ側につく用意があるだろう」（九八頁）と書いている。つまり、ロランは、ソ連をファシズムとの戦いにおける唯一の信頼できる同盟国だと思っていたのだ。しかし、一九三九年に状況が一転する。この年の八月、スターリンとヒットラーとの間で「独ソ不可侵条約」が結ばれる。この条約によって、ソ連は、ドイツがポーランドに侵攻した際、ポーランドの東半分を丸まる支配下に置くことができたのだ。ロランは嫌悪を隠さない。「ヨーロッパの政治思想が骨の髄まで（ウソ）に侵されていることにはうんざりだ。ウソのつき合い。全てがウソだ。ここ数ヶ月の間（数日の間）に、ソ連のウソは、不実さと傲慢さにおいて、ゲッベルスやヒットラーのウソを凌いでいる。私は憤りに胸が震える。私は、誰よりも承知している。この五年、いやそれ以上の長きにわたり、フランスにおいて、ヒットラーへの憎悪を煽り、ヒットラー打倒の戦いをしかけ、ドイツの脅威を弾劾し、民主主義を目覚めさせ、民主主義の力を集結するために鐘を鳴らすよう鼓舞してきたのがソ連だったということを！クレムリンは、ドイツによるポーランド抹殺に加担して、おこぼれに預かるうとしている」（一九四〇年二月、三二六—三二八頁）。

ロマン・ロランのスタンスが孤立を招くことはわかっていた。若き共産主義の知識人や作家の中には強い友情で結ばれた友人が大勢いたが、彼らは事実を歪曲することに努めた。二人の例を挙げよう。まず、ジャン＝リシャール・ブロック（一八八四—一九四七）は、歴史教授の資格をもつ小説家だった。第一次世界大戦のおぞましさを体験したブロックは、一九一九年にはロランに接近し、三〇年代には、ファシズムに対抗するためソ連を支持している。独ソ不可侵条約締結に当たって、彼はソ連の立場を正当化する。西欧の民主主義が、スターリンを信用せずに追いつめて、

ヒットラーの元に走らせたというわけだ。そして、アラゴン。ロランはこの大詩人を評価していた。アラゴンは共産党の規律に忠実であるために、当初、独ソ不可侵条約を弾劾することを拒否している。彼は後にレジスタンスの詩人となるが、ロランはこう書いている、「ジャン＝リシャール・ブロックとアラゴンは、独ソ不可侵条約をばからしいほど必死に擁護している」(二五四頁)と。こうして、ロランは共産党路線からも離れていく。

今まで見てきたように、ロマン・ロランは、政治思想を共にする者たちからも独立を保ち、対立する側とも繋がる、というよりは、繋がりを保ち続けることも厭わなかった。対立側にいた人間には、アルフォンス・ド・シャトーブリアンがいる。実は、この辺りが『ヴェズレー日記』の見せる奇妙なところなのだ。ロランには、政治的な溝を超えて友情を結び、それを維持する不思議な力があつたことがわかる。ロランとシャトーブリアンとの友情は一九一〇年代に遡る。シャトーブリアンは一八七七年生まれで、ロランより少し若い。彼はフランス西部に根ざした郷土小説を著す人気作家だったが、二〇年代に入ると極右思想に傾倒し、三〇年代にはナチズムを熱狂的に賞賛し、ナチズムの中に、中世の神秘主義に連なる新しい神秘主義の形を見出す。開戦前にはドイツを数回訪れ、ヒットラーとも個人的に会談している。一九四〇年二月にシャトーブリアンがヴェズレーを訪れた際に、ロランは会談の様子を記している。

「シャトーブリアンは、ベルヒテスガーデンにヒットラーを訪ね、宗教について議論した(シャトーブリアンはナチズムに中世キリスト教の最後の片鱗を見出していた)。それを受けて、ヒットラーは経済問題を持ち出した。シャトーブリアンはさらに続けた、「新生ドイツを築くためには精神性が必要でしょう。宗教と英雄も必要です。精霊を復活させなければ」。彼がこう言った時、ヒットラーの顔色ががにわかに変わった。瞳は輝き、態度が変わり、シャトーの手を取り顔を近づけると、じっと目を見つめてこう言った「貴方を愛している！」(三二五頁)

これはシャトーブリアンがロランに語った逸話だが、ロランは、彼を非難することもなく、むしろ彼の大きな無邪気さに感動しているようだ。シャトーと言う呼び方にも親近感がこもっており、子供じみた態度を赦す寛容ささえ

感じられる。

一九四〇年、ドイツの金銭的支援を受け、シャトーブリアンは『東 (La Geste)』という雑誌を創刊し、対独協力を訴える。そのため、戦争末期にはドイツへの亡命を余儀なくされ、最後はオーストリアに落ち着き、一九五一年に客死する。そんな人物にも、ロランは驚くほど寛大だ。この客にドイツの蛮行・ユダヤ人排斥・暴力・ダツハウ強制収容所での拷問などについて語り（三三八頁）、客は、現実から目を背け、ナチス指導層を無為に正当化しようとする。しかし、ロランは、非難めいたことは言わない。相対的見地から、自らの主義主張とも距離を置いて、この友人を理解しようと努め、彼のことを極端な理想主義者と判断するに留まっている。日記のもう少し先を読むと、ロランとシャトーブリアンの友人関係を非難する人たちへの答えがある、「私は、理想のために、一度なりとも真の友情を葬るような人間ではない」（一九四二年五月一九日、七七五頁）。ロランの友人への忠誠心・大いなる寛容さが伺われるが、それは、無邪気なほどだと言わざるをえない。彼は、一九四〇年二月の逸話に関して、今日読めば驚くようなことを書いている。「私は審判は下さない。書き留めるのみだ。ただ、はつきりわかっているのは、シャトーが、ナチズムの虜になったとしても、彼の目が、フランス側からヒットラー体制の憎むべき・見下すべき側面しか見ていない連中の目より間違っているわけではないということだ。両者とも間違っている。そして、両者とも正しい」（三三九頁）。これは奇妙な発言であり、我々には違和感がある。ロランは、ヒットラー体制に、憎むべき・見下すべき側面以外のものであると言っているのだろうか？ この問いかけから第二部に移り、ドイツ占領下のフランスにおけるロマン・ロランの姿を追っていこう。ロランのニュアンスのセンスが極限に至り、結果として、彼はある種の麻痺状態、ひいては否定主義に陥っていく。その姿には、はつきり言えば失望を隠し得ない。

二 ロマン・ロラン、ペタン、そして戦争

ロランの言動があまりにニュアンスを含んでいるため、彼は孤立し続ける。「完全反戦・平和主義」が講じて「対独協力者」となった連中にとっては、私はスターリン支持の反ドイツだ。過激な反ドイツ勢力にとっては、私は親ドイツだ。なぜなら、私の家には多くのドイツ人が滞在しているからだ。そして、先の大戦を思い出すブルジョワたちは、私のことを、相変わらずの反戦・平和・非暴力を唱える祖国なき者だと思っているだろう。馬鹿げた話だ！」（一九四三年、九三六頁）

彼はいつも正しかったことになるのか？ 否。ロランが、時として、あまりにナイーブだったことは否めない。彼が知的に孤立したのはなぜかと言えば、戦前は正しかったが、フランスがドイツに占領された後は現実と乖離し始めて、ついには、奇妙な夢想に閉じ籠ってしまったからだだったと言えよう。

さて、一九四〇年六月が、フランス人にとっては、突然の激しいショックに見舞われた時期だったということを、改めて言うておく。祖国がヒットラーのドイツに占領され屈服したのだ。『ヴェズレー日記』も、これをめぐる記述に満ちている。ロランは、多くの市民がドイツ軍進行を逃れるために脱出する姿を目の当たりにするが、彼はヴェズレーから動こうとはしない。そして六月二四日、休戦条約締結（実際は、二日前の六月二二日締結）の噂を耳にする（四四二頁）。

ドイツの勝利を前に、いかに振る舞うべきか？ いかにフランス復興のために貢献すべきか？ ロランの日記を読むと、時に違和感を覚える。矛盾したことや、今読むと愕然とする記述もある。フランスの国全体がそうだったように、ロランも途方に暮れているように見える。ただし、あくまで、これが日記であることを忘れてはならないだろう。彼の言葉は、首尾一貫したテキストでもないし、説教でもない。彼が試行錯誤しながら思索をめぐらす、それがそのまま書かれているのだ。

そのため、占領初期に書かれた数ページには、ロランには不利になり得るようなことも書かれている。

ロマン・ロランが、ずっと、ドイツとその文化を大いに賞賛していたことを忘れてはなるまい。フランスとドイツが協力することは、彼にとつては、決して馬鹿げた構想ではなかった。一九四一年三月、こんなことを書いている、「その構想自体はいい。実現すべきだ。ただし、両者が真摯に協力を望んでいるならばの話だが」（五六四頁）。ドイツと協力することは、アメリカ覇権主義に対抗できるヨーロッパの構築のための手段だと考えていたのだらう。「世界が強硬なアメリカに支配されるようなことになれば、私は、ドイツに支配されるより百倍の嫌悪と恐怖を感じるだらう」（五五八頁）。彼はさらにこう続ける。「ヒットラー率いるドイツは、ヨーロッパ合衆国、世界合衆国を構築するよう動いている。我々の文明から、人を隷属させ腐敗させる（金）という癌を根こそぎにする。我々の民主主義の力では到底できないことだ。なぜなら、我々の民主主義は、骨の髄まで侵されているからだ」（四七五頁）。日記の一節にすぎないが、書かれているという事実は無視できない。

とは言え、ロランに石を投げるようなことは慎もう。ほとんどの場合、ロランは、彼が愛するドイツはナチス・ドイツではなく、永遠なるドイツだと明言しているからだ。「我々のように、民族とその指導者たちの犯罪と犯罪的な狂気を区別して、人間の友愛を信じ続ける人間は、ほんの一握りしかない」（一九四一年四月二日、五八三頁）。

そして、特に、根本的な次元で、最も深淵なる信念に動かされたロランは、ナチス体制もヴィシー体制も支持することはできなかった。

ヴィシー体制が敷かれると、ロランは直ちに不信感を露にする。ヴィシー政権はドイツの要求とあらば何でも熱心に受け入れ、敗北の「責任者たち」をあまりに性急に裁こうとしていた。一九四〇年七月三〇日の日記に、ロランは「犯罪的政令^{デクレ}」と記している。ヴィシー政権は政令を公布し、一九四〇年五月一〇日から六月三〇日の間に、フランスを離れた全てのフランス人を恣意的に裁こうとしたのだ。「恐ろしい自由裁量」とも記している（四六六頁）。一九

四〇年九月には、「おぞましい政令」^{デクレ}として九月六日に公布された一連の政令に憤っている。この政令は、一部のユダヤ人からフランス国籍を剝奪することを視野においていた（四八八頁）。対独協力誌の記事にも憤りを隠さない。『東』最新号のおぞましい反ユダヤの記事の数々。シャトーブリアンの名誉を汚すものだ。心底悲しく憤りを感じる』（一九四〇年一〇月九日、五〇二頁）。一方、一九四一年六月に公布されたユダヤ人規程にも憤っている（六二七頁）。

ロマン・ロランは、このように、ヴィシー政権をまったく信頼していない。ペタン元帥個人のことも評価していない。シャトーブリアンの言葉としてロランが書き留めたペタン元帥は、「まじめで正直だが弱腰で幼い。子供じみている。自分の尊厳と人気に上機嫌。各地の歓迎会に出るのが大好きで政治的経験などない。士官学校出の小役人」（一九四〇年二月二六日、五三二頁）であった。

しかし、ロランは、レジスタンス側につくこともない。彼は、ドゴールと自らがドゴール主義者と呼ぶ人たちのことを狂信的だと思っている。ドゴールが、ダカールの基地をヴィシー政権支配から奪還しようと試みて失敗した時、ロランは彼に厳しい評価を下している。「フランスの狂信者集団の怒り狂う精神が、時代を超えて見て取れる」（一九四〇年九月三日、四九三頁）と。他にも、ドゴールの傲慢なフアナイズムと記している（五一四頁）。彼はドゴールのことを、内戦を企てる非常識な人間と考えている。ロランの目には、ドゴールは、モラスに傾倒する士官で、民衆からは乖離した信用できない人間だと映っていた。ロランの共産党員の友人たち、特にアラゴンなどは、ドゴールのことを愚か者扱いし、ただのマクマオンと呼んでいた（一九四四年一月一四日、一〇八四頁）のだから、ドゴールに対するロランの評価が変わることはなかったのだ。

ペタンでもなくドゴールでもなくというのが、ロランのスタンスだった。「ロンドンにいるフランス人たちが、フランスにいるフランス人たちを煽って、日々、ヴィシー政権と対立させている。そして、一日の日曜日には、ロンドンでもパリでもヴィシーでも、皆がジャンヌ・ダルク祭を祝おうというのだ。それが、自分の利になり相手の不利

になると思っているからだ。イギリス人もドイツ人も、ジャンヌ・ダルクの取り合いだ。ヴィシー政権は、ペタンとジャンヌ・ダルクを比較する始末だ。それにしても、シャトーブリアンの『東』誌上で、ペギーの息子マルセルが対独協力を説き、ドイツを真のキリスト教国家であると讃えるとは！ 父ペギーがこれを知ったら、マルヌ河畔の、彼の血を吸った地中で怒り心頭であろう」（一九四一年五月一〇日、六〇一頁）。

ロランは、こうして「好機を逸した」とも言えるだろう。彼は誰のことも信じなかった。つまり、二度とスターリンを信頼することはなく、それはソ連の参戦後も変わらない。さらに、彼は自らアメリカ金権政治と呼ぶものを嫌悪している。彼は全てに嫌気がさしていた。彼は、一九四一年一月にこう書いている、「政治にも人間にも愛想が尽きた。彼らは救いようがない」（五三九頁）と。

こうして、ロランは、現実離れた昔からの夢に執着していく。

結論——唯一の救いは友情

ロランは多くの人と会い、多くの出来事に立ち合うが、自ら参画していくにはあまりに理想家だったのだろう。日記にもある種の悲壮感が漂っている。もちろん高齢のせいもあっただろう。個人的な事情も考えられる。一九三九年には、スターリン政権を公に弾劾することもできたはずだが、そうしなかったのは、ソ連にいた妻の息子に報復が及ぶことを恐れたからだ。とは言え、日記には、覚めきった知識人の姿が見て取れる。彼は、もはや時代の流れについていけないことを自覚しているようだ。

このような状況で彼に残されたものは、何だったのだろうか。ロランに喜びをもたらしたのは、旧友ポール・クロードルとの交友が再開したことだったようだ。クロードルとロランは、名門ルイ・ル・グラン高校の級友だった。ロランは、自分とはまったく違うタイプのクロードルと五〇年ぶりに再会する。ロランの日記に綴られたクロードル

との交流は感動的だ。同時に、とても示唆に富んでいる。なぜなら、二人の間にはまったくタブーがないからだ。また、ロランは、数々のクロードルの言葉を、ほとんどその場で書き留めたように生き生きと記している。一九四二年六月二八日付けの記載（八一〇―八一七頁）からは、クロードルがドイツ人を毛嫌いし、ペタン元帥を真つ向から見下していることがわかる。「彼はこう言う、「ペタンめ、あの顔につばを吐いてやりたい！ 偽善者め。敬虔ぶって何も信じてはいない。家族が大事だと？ 自分は二度も三度も離婚して、子供が大嫌いだ！」」

話題はあらゆることに及ぶ。ムツソリーニ（あ、ごろつき、あ、バカ）、作家たち、クロードルはシュアレスを評価せず、ペギーには何の好意も持っていない。全体的には文学や音楽談義が多く、彼の愛するウエルギリウス、ベートーヴェンが登場し、教会の態度については、クロードルは臆病だと批判している。その当時、彼は、ユダヤ教シナゴークの大祭司に支援の書面を送っていたのだ。クロードルの姿は自由で勇敢だ。宗教についても、二人は大いに語り合っている。ロランはクロードルを羨ましく思っていた。「彼がノートル・ダムで恩寵を受けたことが、いかに幸運なことであつたかを、私は彼に言った」（八一三頁）。

ロランは信仰心を持ちたかつた。彼は超越した存在を模索していた。また、クロードルに対する深い敬愛が感じられる。クロードルは、信仰に何の疑いも持たず、「死んだら神と対面する」（八二二頁）と確信している。

クロードルはロランを改宗させることはできなかった。しかし、彼は、ロマン・ロラン没後一〇年経つた一九五四年に、感動的な哀悼の意を捧げ、この偉大な魂は、信念と希望のみで満たされていと讃えた。

では、最後に、今日、ロマン・ロランの日記を読む意義は何なのかを考えよう。

まず、知識人の持つ影響力の限界を知ることができる。ロランは、最善の場合、相談役になり得た。しかし、例えば、共産党員たちは、彼の意見が党の方針に逆らうものであれば、それ以上耳を貸そうとはしなかった。彼自身がそのことを深く感じていたからこそ、日記には哀愁が漂っているのだろう。私は、彼が最初に失望感を覚えたのは、ソ

連の現実を目の当たりにしたときだったのではないかと思う。先ほど言った通り、ロランは一九三五年にスターリンに会った。彼は、実はこの会談の場と、別途、手紙を通じて、ヴィクトール・セルジュという人物のために働きかけていたのだ。セルジュはソ連の知識人で、フランス語を話した（ベルギー生まれ）。ロシア革命にも参加したが、トロツキー派で反スターリンだったために、ウラル地方に追放されていたのだ。ロランの介入と国際的にも支援運動が広がったおかげで、スターリンは彼を釈放し、一九三六年に国外追放にした。この事件以来、ロランは、スターリン体制に不信感を抱き始めたと思われるが、それを公言することはなかった。アンドレ・ジッドが、一九三六年に『ソビエト紀行』を著し、共産党員たちから激しい非難を受けたのとは対照的だ。おそらく、先ほど話した個人的事情もあつたのだろうが、ソ連を攻撃することが、当時、ソ連の第一の敵だったファシズム勢力に有利になることを望まなかったからだと思われる。独ソ不可侵条約の締結に当たっては、違和感と怒りを日記に密かに綴っている。彼は、知的に誠実であり続けようとするれば、活動家にはなれないとわかつたのだ。本物の知識人は、繊細過ぎ、ニュアンスを含み過ぎて、また正直過ぎて、それゆえに優柔不断となり、政党には利用価値がないのだ。知識人の居場所は、多小の差はあれ、常に舞台裏であると言えよう。真に決定的な役目を担うことがもうできないと自覚したロランからは、物悲しさが漂う。

一方、ロランの日記は、実に今日的な問題をもう一つ提示している。理想主義とプラグマティズムとの間で、いかに折り合いをつけるかということだ。生涯にわたり、各国の自主的な意志に基づく平和の構築を信じていたのに、ある国が狂信的に暴走し始めたら、どうしたらいいのか。極端な反戦・平和主義者たちが、何でも戦争よりはましだと考える一方、ロランのように、それは危険な自殺行為だと考える人々もいる。反戦・平和主義を唱えることは、「敵・味方」というカテゴリーに嵌められることを拒否することだとも言える。確かに、それは尊敬に値する拒否だろう。しかし、二者のどちらか一方が、頑に、他方のことを「敵」と見なしている場合はどうなるだろう？ 結局のところ、

「反戦・平和主義者」の代名詞だったロマン・ロランは、反戦・平和主義を一边倒に主張することの限界を認識したのだろう。それこそが、他のあらゆる点にも増して、今日、彼の日記を読むことを非常に興味深いものになっている。

(甲南大学教授・国際言語文化センター)

(本稿は、「アンステイテュ・フランセ関西」および「ロマン・ロラン研究所」共催で、二〇一五年一月二八日、アンステイテュ・フランセ関西で行われた講演会「ロマン・ロラン」聞き手として、証人として」の内容を再編集したものである。)

戦後七〇年と憲法九条の意義

曾我部 真裕

一 はじめに

本日は伝統あるロマン・ロラン研究所の講演会にお招き頂き、研究所の関係の皆様には厚く感謝申し上げます。また、連休初日にもかかわらずお運び下さった皆様にもお礼申し上げます。

さて、なんとも大変なタイミングにあたってしまったが、本日は、「戦後七〇年と憲法九条の意義」ということでお話をさせて頂く。憲法九条についてはこのところたいへん大きな議論が巻き起こっていたところであるが、本日はこのタイトル通り、いま現在の問題に焦点を当てるといよりは、歴史的な流れを解きほぐして、考える材料にして頂ければと思っている。

まず、講演の前半というか半分以上になると思うが、憲法九条はどのようにして生まれ、その後、現実はどういうに展開してきたのだろうかという事実関係をまずは一通りお話をする。そこでは、九条がなぜ制定されたのかということ、そして、その後の歴史的展開の中で九条が迎えた三つの転機ということを中心にお話する。

そして、後半では、前半の話も踏まえ、戦後七〇年の間、憲法九条については二つの読み方が対立拮抗してきたことに注目して、お話をする。なお、本来はいわゆる国際貢献にまつわる問題にも同じくらい触れなければならないが、

時間の関係で簡略にせざるをえないことをお断りしておく。

二 憲法九条の誕生と展開

(一) 憲法九条と前文

レジュメ最終ページの資料にあるように、憲法九条は次のような規定である。なお、下線部の意味については後にお話するので、とりあえず無視しておいて欲しい。

ポイントとしては、一項で戦争と武力による威嚇又は武力の行使を放棄しているということである。戦争と武力の行使とはどう違うのか。戦争は宣戦布告を伴う正式の戦争のことであり、武力の行使は戦前の満州事変のような事実上の戦争のこと。

そして、二項では、陸海空軍その他の戦力を保持しないとしていること。他国の憲法を見ても、例えば侵略戦争をしないといった規定を置くところはある（一九四七年イタリア憲法二一条、一九四九年ドイツ基本法二六条一項など）が、戦力を保持しないとしているところは、こんにちにおいてもほとんどない。九条二項のような規定は、一九四六（昭和二一）年の憲法制定当時はもちろん、今現在においても日本国憲法の際立った特徴である。

また、平和主義という憲法九条が思い出されるだろうが、日本国憲法には前文というものがあり、そこにも関連する内容があるので紹介しておく。前文とは憲法の本体となる条文とは異なるが、憲法の理念が普通の文章の形で述べられているものである。日本国憲法の前文には、戦争の反省と平和への誓いに関する部分が大きな割合を占めており、崇高な理想が表明されている格調高い文書である。時間の関係ですべてを紹介できないが、資料には全文載せてある。せっかくなので、あとで読んでおいて欲しい。

以下のお話との関係で重要なポイントを三点指摘しておく。一つは、第一段の「政府の行為によつて再び戦争の惨

禍が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言」とするところである。ここでは、政府の暴走によって戦争が引き起こされないようにするために、国民主権つまり民主主義を宣言するということが述べられている。戦争を起こさせないためには、九条のような条文で戦争を禁止するだけでは足りず、国民がしっかりと政府を監視しておく必要があるということである。さらに言い換えると、いわゆる市民社会がしっかりといることが必要なのである。先走ることになるが、平和主義と民主主義の結びつき、これは今後の日本において非常に重要なポイントである。

さて、前文の二点目のポイントは、第三段「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」という部分である。これは何のことを言っているのだろうか？ 一見ただけではわかりにくい、これは国連のことである。国連憲章ができたのは一九四五（昭和二〇）年六月である。日本国憲法が公布つまり議会で議決された後、国民に対して正式に示されたのは一九四六（昭和二一）年一月三日である。この日は言うまでもなく文化の日であるが、これは日本国憲法の公布を記念しているのである。なお、五月三日の憲法記念日は、一九四七（昭和二二）年五月三日に憲法が施行つまり実際に効力が発生した日を記念するものである。

それはそうと、二つ目のポイントの話に戻ると、憲法の制定作業は、時期的には国連憲章が成立した後に行われた。そして、後にも説明するが、国連憲章は第二次大戦の反省に立って、国々が戦争や武力の行使に訴えることを禁止し、戦争や武力の行使に訴える国に対しては、国連加盟国が共同して制裁を加えるという考え方をとっている。これを集団安全保障というが、日本国憲法はもともと、軍隊を持つ代わりに、この国連による集団安全保障体制を信頼して日本の平和と独立を守ろうとしていたのである。なお、今お話している集団安全保障と、最近話題の集団的自衛権とは、ネーミングは似ているが別物なので注意を（レジュメの図参照）。

三つめは、「われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社

会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ」「いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならない」という部分である。この部分は、いわゆる国際貢献をどのように進めていけばよいのかという点に関わり重要であるが、今回のお話では十分触れることができない。

(二) 憲法九条はなぜ制定されたか。

さて、いま九条には国際的に見ても際立った特徴があることを指摘したが、では、なぜこのような条文が採用されたのか。

ある意見によれば、憲法全体が占領下でGHQから強制された「押し付け憲法」であり、九条も日本の国力を殺ぐためのものだとも言われるが、どうだろうか。

この点については、九条の発案者が誰だったのかという議論が興味深い。日本国憲法の原案自体はGHQによって作成されたものであり、この点に限れば押し付け憲法論者が主張するのも間違ではないのであるが、九条に関して言えば、もともと戦争放棄・戦力不保持というアイデアをマッカーサーに伝えたのは日本側であると言われている。具体的には、GHQによる憲法制定作業が始まる直前の一九四六年一月にマッカーサーと面会した当時の幣原喜重郎首相の発案であったとされる。幣原は、外交官出身の政治家であり、戦前は外務大臣として、国際協調を軸とする外交を展開し、軍部と対立した人物である。この幣原がマッカーサーに戦争放棄・戦力不保持というアイデアを示し、これに同意したマッカーサーが憲法草案の基本方針の一つとしたのだという説が有力である。これが、GHQによって作成された憲法草案に取り入れられ、さらに、これを元にした日本側の案にも引き継がれて九条として成立したのである。

ただし、のちに述べるように、この過程で条文の表現に若干の修正があり、それが憲法制定後に大きな意味を持つ

たことにも注意する必要がある。

ということで、九条のアイディアは決してアメリカあるいはGHQの押し付けというわけではないのである。

さらに言えば、幣原がこのようなアイディアを出し、マッカーサーがそれに同意したというのは、単なるその場の思いつきではない。というのは、これも後に述べるように、このようなアイディアには実は長い歴史があり、戦前にも不十分ながら国際条約などで一部実践されていたことである。もちろん、様々な現実政治的な事情も踏まえてのことではあるが、こうした背景のもと、九条のアイディアは示されたのである。

しかし、純粹な戦争放棄・戦力不保持のアイディアは、憲法制定後わずか数年にして転機を迎えることになる。さらに、一九九〇年代になり、貧困国から経済大国へと発展を遂げた日本に対し、湾岸戦争を契機に大きな課題がつきつけられることになり、第二の転機となる。さらに、昨年七月に政府の憲法解釈が変更され、限定的ではあるが集団的自衛権を認めることとなり、こうした憲法解釈を前提とする安全保障法制に関する法案が国会に提出され、本日未明に成立した。これは第三の転機と言えるだろう。そこで、以下ではしばらく、この三つの転機について考えたい。

(二) 最初の転機——自衛隊の発足と日米安保条約

純粹な戦争放棄・戦力不保持のアイディアは、戦後初期の政治を担った吉田茂首相によっても支持された。ただ、吉田首相がそうしたのは、平和思想を強く支持していたからというよりは、より現実的なものであった。つまり、日本が早く経済復興を成し遂げるためには、財政に負担をかける軍備を持たないほうがよいという考えである。

他方、アメリカ政府は、アメリカとソ連との対立、いわゆる冷戦が激化するにつれて日本に対する政策を変更した。こうした冷戦の激化は早くも一九四七（昭和二三）年には顕著になっていく。アメリカ政府は日本に再軍備を求めるようになったが、日本政府は九条を盾に消極姿勢をとった。また、注目すべきことに、マッカーサーも再軍備には消

極的で、日本政府の側に立った。

しかし、大きな転機は一九五〇（昭和二五）年に勃発した朝鮮戦争である。占領下で日本に駐留していたアメリカ軍は、この戦争のために朝鮮半島に出動しなければならなくなり、日本の防衛と国内治安について空白が生じるようになった。そこで、マッカーサーの指示によつて、同じ一九五〇年に警察予備隊が創設された。

警察予備隊はともかくも警察的な性格のものだと説明されたが、わずか四年後の一九五四（昭和二九）年には自衛隊法が制定されて自衛隊が発足、国内の治安維持だけでなく、国防を担う組織であることが正面から明らかにされた。したがつて当然、自衛隊が九条違反であるという批判が国会やマスコミ、学界等からなされたが、政府はこの点についてどのように説明したのだろうか。

政府の説明のポイントは三つである。まず、憲法は自衛権を否定していないということである。自衛権は独立国として当然に認められる権利であるからだという。第二に、九条は自衛のための武力の行使は禁止していないということである。というのは、憲法が禁止するのは、国際紛争を解決する手段としての戦争や武力行使である。ここで、国際紛争を解決する手段というのは、典型的には、戦前における満州への進出のような、権益獲得を求めてなされる侵略のようなものを指し、他国から武力攻撃があった場合にそれを撃退することは、国際紛争を解決する手段としての戦争・武力行使には当たらない。第三に、自衛隊は、九条二項の「戦力」に当たらない。「戦力」とは、自衛のために必要最小限度の実力を超えるものを言うのであつて、自衛隊は自衛のための必要最小限度のものであるから、戦力に当たらないという。

こうした政府の九条解釈は、少しずつ改良されながらも、基本的には今日まで受け継がれている。

以上が自衛隊の話であるが、次に安保条約である。安保条約は、自衛隊創設に先立つ一九五一（昭和二六）年、連合国との戦争状態を終結し、日本の独立を回復するためのサンフランシスコ平和条約と同時に締結された。安保条約

によって日本はアメリカ軍に基地を提供し、アメリカ軍の駐留を認めることとなった。他方、アメリカは日本への武力行使などがあつた場合に日本を援助することができるとされた。

安保条約が締結された時期には、警察予備隊は存在したものの、日本の防衛を担うには力不足であり、日本の安全を確保するためにはアメリカ軍の駐留を認めることはやむを得ないことだったかと思われる。しかし、安保条約は国民の強い反発を呼び、各地で米軍基地反対運動が盛り上がった。なお、基地反対運動というと沖繩が想起されるが、当時沖繩はアメリカの施政下にあつた。安保条約締結直後の反基地運動は、本土のものである。

その一つが砂川闘争である。これは、東京の砂川町（現立川市）にあつた立川飛行場の拡張工事への反対運動であるが、その中で飛行場の柵を一部破壊し、敷地内に数メートル立ち入ったことが罰則に触れるということで、起訴されたものである。この事件では、安保条約が九条に反するかどうか大きな争点となった。一番の東京地裁（東京地判一九五九年三月三〇日）は、在日米軍は九条二項にいう「戦力」に当たるから違憲であるとした。これに驚いた検察側は、高裁を飛び越して直接最高裁に上告した。

最高裁判決（最大判一九五九年一月一六日）は、まず、政府解釈と同様に、国として自衛権が認められるのは当然であるから、自衛のために他国に協力を求めることも可能であるとする。また、九条二項で禁止される「戦力」とは、日本が指揮管理するものを指すのであつて、外国軍隊は「戦力」には当たらないとした。そして、安保条約自体の合憲性については、細かく言うといういろいろあるのだが、憲法判断は避けると言いながら、実質的には九条や前文等の趣旨に合致するとして、積極的に合憲性を述べている。

この砂川事件最高裁判決は、今回の集団的自衛権を巡る議論でもよく引き合いに出されており、安倍首相も含め、この判決は集団的自衛権が合憲である根拠となると主張している。しかし、この事件では集団的自衛権は争点となつておらず、この判決がそのような根拠になると考えることはできない。

さて、本題に話を戻すと、一九五一年に締結された安保条約は、一九六〇年、岸信介内閣のもと、より対等性の強い新安保条約に改定され、現在に至っている。ただし、条約自体は変わっていないが、その実質はこの五〇年余り経って大きく変容していると言われている。

それはさておき、以上のようにして、戦後日本の安全保障体制は、日米安保体制と自衛隊が二本柱となっていた。そして、この二本柱のどちらにウェイトを置くかという点については、自衛隊を中心とする自主防衛を重視すべきだとの主張もあったものの、全体的には、日米安保体制が重視され、日米の防衛協力は徐々に深まって行き、一九八〇年代以降、「日米同盟」という表現が使われるようになってきている。今回の安保法制は、その延長線上にある。

しかし、日本が経済成長を遂げるにつれて、このような日本防衛とは異なり、より広く国際的な平和と安定に対して日本が貢献することが求められるようになってきた。この点で転機となったのが、一九九〇年の湾岸戦争であった。

(四) 第二の転機としての湾岸戦争

湾岸戦争は、フセイン大統領のイラクが隣国クウェートに侵攻したことに對し、アメリカを中心とする多国籍軍がこれを排除するために軍事力を投入したものである。この湾岸戦争においてアメリカは日本に対して自衛隊の出動を中心とする人的貢献を求めたが、日本は憲法九条との関係などを理由にこれに応じなかった。他方で、増税までして合計一三五億ドル（一・八兆円）という極めて多額の経済的な支援を行った。しかし、有名な話であるが、戦後にクウェートが各国に感謝の意を示した際、日本が除外されていたことが国内的には大きなショックを与えた。これがトラウマとなり、やはり人的貢献をしなければならないという政治の流れが生まれたのである。

湾岸戦争の後少し立って、カンボジアで長年の内戦について和平が成立し、国連のPKOが始まった。日本政府はこれに自衛隊を参加させるために、PKO協力法の制定を図ったが、野党社会党が牛歩戦術などで激しく抵抗したこ

とは記憶に残っているかもしれない。PKOとは平和維持活動のことであり、軍事的色彩のある活動だけではなく、選挙の実施や復興事業への協力なども含むものである。PKO協力法は結局一九九二年に成立したが、その定める活動内容は、もちろん自衛隊が武力を行使するといったものではない。

その後、ここでは内容には立ち入らないが、一九九七年には、日米安保条約のもとでより具体的な方針を定めているガイドラインの改訂が行われ、一九九九年にはそれを法律化する周辺事態法が制定された。

さらに、二〇〇一年の九・一一テロを受けたアメリカのアフガニスタン攻撃やイラク攻撃に関連して、テロ対策特別措置法（二〇〇二年）やイラク特別措置法（二〇〇三年）が制定された。

このように、一九九〇年代以降、日本あるいは自衛隊には、日本に対する武力攻撃を排除するという任務だけではなく、国際貢献が求められるようになった。憲法九条を考慮して、これらの活動において武力行使は認められておらず、戦闘中については後方での物資輸送等の支援、戦闘終結後は復興支援活動に限定されていたが、しかし、その一部は実質的に見て武力行使に当たるのではないかと批判があつたりして、憲法九条の政府解釈との整合性が厳しく問われてきている。

（五）第三の転機——安保法制

二〇一四年七月一日、安倍内閣は政府の九条解釈の変更を閣議決定した。閣議決定というのは、内閣の正式な意思決定のことである。そこでは、周知のように、憲法九条は、個別的自衛権に加え、限定的な集団的自衛権をも容認しているという解釈がとられた。これに対しては、国会において反対の意見が少なくないほか、全国で多数の抗議集会やデモが展開され、一般国民にも反対の声が少なくない。さらに、憲法の専門家の圧倒的多数（朝日新聞が主要な憲法学者に対して行ったアンケートによれば、今回の安保法制は一二三名中一〇四名が違憲だと回答している）もこうした解釈は違

憲の解釈であるという立場に立っている。

何が問題なのだろうか。そもそも、集団的自衛権とは何か。自衛権には個別的自衛権と集団的自衛権があるとされる。個別的自衛権は、自国に対して武力攻撃があった場合にこれに反撃して武力の行使を行う権利であり、まさに文字通りの自衛である。これに対して集団的自衛権は、同盟関係を前提として、同盟関係にある他国（例えばアメリカ）に対する武力攻撃について、直接に攻撃を受けていない他国（例えば日本）が共同して反撃するための法的根拠である。直接に攻撃を受けていないのであるから、文字通りの自衛とは言えないというわけである。

そして、従来の政府の解釈では、文字通りの自衛については最小限度は認められるから、個別的自衛権は認められるが、集団的自衛権は他国に対する攻撃に対する反撃であるから九条では認められないとしてきた。こうした政府の解釈は、何十年間も一貫して維持されてきており、昨年七月の閣議決定はこの定着した解釈を変更したということになる。

具体的に比較してみよう。これまでの解釈では、次の三点が揃えば、自衛のための武力行使ができるとされてきた（旧三要件という）。

【旧三要件】

- ① わが国に対する急迫不正の侵害があること
- ② この場合にこれを排除するために他に適当な手段がないこと
- ③ 必要最小限度の実力行使にとどまるべきこと

他方、昨年七月の閣議決定後は、次の三つが武力行使の条件であるとされた（新三要件）。

【新三要件】

①我が国に対する武力攻撃が発生したこと、又は我が国と密接な関係にある他国に対する武力攻撃が発生し、これにより我が国の存立が脅かされ、国民の生命、自由及び幸福追求の権利が根底から覆される明白な危険があること

②これを排除し、我が国の存立を全うし、国民を守るために他に適当な手段がないこと

③必要最小限度の実力行使にとどまるべきこと

これを比較すると、一番違うのは①であり、武力行使が認められるのは日本に対する武力攻撃があった場合に限られるというのが旧解釈であったが、新解釈では、他国に対する武力攻撃であっても、それによって日本の存立が脅かされる等の場合には武力行使を行うことは憲法九条が認めているとされる。

ということ、今回の解釈変更やそれに基づく安保法制について問題となっている点として、三点あげておく。まず、このような九条の解釈が許されるかどうかという点である。

それから、第二の問題点として重要なのは、そもそも、長年維持され定着してきた従来の政府解釈を変更したことの是非である。この点については細かく言えばいろいろな議論があるが、最も強い批判として、このような解釈変更が立憲主義の否定であるという批判がある。これは、政府の活動を縛るのが憲法の役割であるというのが立憲主義の考え方であるが、政府が都合の良いように憲法の規定を解釈できるのだとすれば、憲法による縛りは無意味になってしまう、立憲主義に反するということであろう。

さらに、第三点として、仮に解釈変更が許されるとしても、新三要件は非常に曖昧であって、武力行使の濫用を防止できないのではないかということである。特に、安倍首相が新三要件に当たりうる例として、ペルシャ湾のホルム

ズ海峡が機雷で封鎖され、石油が輸入できなくなった場合に言及したことが気になる。これは、経済的に一定の影響があるというだけで集団的自衛権が行使できるかのような説明であり、新三要件が非常にゆるやかに理解されているのではないかとこの危惧を抱かせるものである。

三 九条の七〇年をどう読むか

前半では、少々長くなったが、九条をめぐる戦後七〇年間の歴史を見てきた。これからの後半では、この歴史をどのように見るかという点についてお話をする。

冒頭にお話ししたように、ここでは三つの考え方を紹介する。すなわち、非戦の思想、同盟の論理、そして国連による平和の三つである。

(一) 非戦の思想

憲法九条を大事にしようとする草の根の市民運動が広がっているが、そこで考えられているのは、戦争をなくし、平和を実現するには、戦争を放棄し、軍備を撤廃するしかないということである。自衛隊に対しても、まるごと否定するところまで行くかどうかはともかく、災害救助のための組織に衣替えすべきだとかいったことが主張される。これを非戦の思想と呼ぶ。これに対する批判として、現実には日本の周辺に軍事大国が存在し、脅威が存在するのであるから、このような考え方は非現実的であるということが言われる。

もちろん、非現実的だと切って捨てることは簡単である。しかし、このような思想には長い歴史がある。古くは二〇〇年余り前の一七五九年、哲学者のカントが、有名な『永久平和のために』という著作で、常備軍の撤廃を訴えていた。これは、常備軍という存在そのものがかならず際限のない軍備拡張につながり、戦争を生み出すという考え

方に基づくもので、「日本国憲法の戦争放棄・軍備撤廃と思想的に直結している」とも言われる。

日本でも非戦思想は明治半ばに盛んになったが、そこで大きな影響力をもったのが、ロシアの作家トルストイの非戦思想であつた。トルストイは、キリスト教的なヒューマニズムに基づき、「悪をもつて悪に抗するなかれ」という立場をとつた。つまり、戦争という悪に対抗するために戦争という悪の手段をとれば、自らが悪に陥るというだけでなく、さらにその悪の反抗を呼び起こすだけで悪は増長し、永遠なる悪循環を繰り返していくことになる。

しかし、その後の日本の非戦思想は社会主義と結びつけて主張されたこともあつて、政府からの弾圧を受けてしまふ。有名な事件としては、日露戦争中も圧倒的な主戦論に反対して非戦論を唱えていた幸徳秋水は、一九一〇年の大逆事件で逮捕、翌年には死刑判決を受けてしまふ。こうして、戦前の日本では非戦思想の社会的影響力は限られたものにとどまつた。

他方、世界の動きを見ると、一九世紀の終わりから、特に悲惨な第一次大戦の体験の後、国際紛争を戦争以外の手段で解決するための国際法上の取り組みが徐々に進んできており、その際に非戦思想は大きな役割を果たした。

一九世紀末以降の国際法の展開でもっとも大きなポイントは、「戦争の違法化」である。つまり、それまでは国際法上、自衛のためであるがそれ以外の目的であるが、戦争は違法ではなかつたのである。

そして、戦争の違法化にむけた動きとして重要だつたのが、第一次大戦後に発足した国際連盟（一九一九年）と、一九二八年の不戦条約である。国際連盟規約では、加盟国に対して紛争を平和的に解決する義務を定めていた。ただし、平和的解決ができなかつた場合には戦争が認められる点でなお不徹底であつた。そして、不戦条約では、国際紛争を戦争によつて解決することを違法とした。これは戦争を原則的に禁止したものとして画期的であつた。もっとも、不戦条約も自衛のための戦争は禁止されていなかつた。また、正式の戦争ではない事実上の戦争についても禁止されていなかつた。

なお、レジュメに一条の条文を上げているが、不戦条約の「国際紛争を戦争によって解決すること」の禁止とか、自衛のための戦争は認められるという考え方は、文言上の類似点からも分かる通り、後の日本国憲法九条解釈にも影響している。

それはさておき、不戦条約は日本も含む当時のほとんどの国々が参加し、戦争が原則的に禁止されるというルールが国際法上確立したことは画期的なことであった。もともと、このルールを実際に守らせるための仕組みは全く不十分であった。そのため、例えば日本が一九三一年の満州事変などを自衛権の発動であると主張した際にも、それが不当な解釈であるとして差し止めることができなかったのである。また、日本が満州「事変」という名称を使ったのは、正式の戦争ではないことを主張する意味合いがあった。

ところで、いま満州事変に言及したが、一九三〇年代はヨーロッパにおいてもファシズムの台頭によって再び戦争の危機が迫って来ていた。これに対して反ファシズム運動も展開されるようになっていったが、そこで活躍したのがロマン・ロランであった。反ファシズム運動に対抗してフランスやスペインで人民戦線政府が誕生したが、その立役者となったのが、国際的な反ファシズム、反戦主義団体であるアムステルダム・プレイエル委員会であり、その中心人物の一人がロマン・ロランであった。

以上のように、戦前にも非戦思想に導かれた国際法の展開が見られたわけであるが、結局のところ第二次世界大戦を止めることはできなかった。第二次大戦後に設立された国連は、戦争違法化という戦前の成果を踏まえつつ、集団安全保障体制によってそれを実効化しようとするものである。

そして、日本国憲法九条は、日本の安全を国連の集団安全保障体制に委ねることを前提に、さらに軍備を撤廃することによって非戦思想を突き詰めようというものである。日本国憲法制定の際にGHQ側の責任者として重要な役割を果たしたGHQ民政局長コートニー・ホイットニーは、九条は恒久的平和への動きについて、日本が世界に対して

道徳的なリーダーシップをとるものであると述べていた。

少なくとも日本国憲法制定当初においては、このような捉え方が九条を読む際のもっとも素直な読み方であったことは間違いないだろう。また、主流派の憲法学や、五五年体制下での革新政党つまり社会党、さらには草の根の平和運動を担った市民たちが共有していた自衛隊は違憲だという考え方、さらには日米安保条約が日本を戦争に巻き込むもので違憲という考え方は、こうした非戦思想の到達点としての九条の読み方に基づいている。

こうした考え方は、今回の安保法案に反対して大規模なデモが繰り返し行われたことから分かる通り、今日の日本でも広く支持されている。なお、先日朝日新聞が主な憲法学者に対して行ったアンケートに対して、現在の自衛隊について、一二二名中五〇名が違憲、二七名が違憲の疑いありとしている（合計六三％）。

しかし、これとは大きく違う九条の読み方もなされてきた。次にこの点についてお話する。

（二）現実主義の論理

いま、九条は軍備の撤廃まで求めることによって非戦思想を突き詰めたものだという捉え方を紹介したが、しかし、これは国連の集団安全保障体制を前提としていたことにも注意が必要である。集団安全保障体制は、加盟国のどこかが他国に侵略をした場合には、国連が武力で対抗するというものであり、戦争というかはともかく、武力行使を否定するものではない。したがって、日本国憲法を国連憲章とセットで考えれば、九条が非戦思想を徹底したものだということにはならないように思われる。

このように、九条が国連の集団安全保障体制による平和を期待していたことには疑いはないが、周知の通り、この体制は国連憲章が想定していたようには機能しなかった。冷戦のもとでは、アメリカとソ連という二つの超大国を中心とする勢力のバランスによって少なくとも世界規模での戦争が抑止されてきた。国際政治に関する現実主義的な見

方の一つとして、勢力均衡や同盟によって戦争を抑止し、平和を維持するという考え方がある。

戦後ほとんど一貫して政権を担ってきた自民党を始めとする保守政党は、国連の集団安全保障体制が機能不全に陥っている中、こうした現実主義に基づいた安全保障政策を採用した。それが、日米安保体制と自衛隊を軸とする安全保障政策である。そして、政府は、九条についてもそれに基づいた解釈を採用してきた。

こうした九条解釈は、先程も触れたが、政府解釈を簡単に繰り返すと、九条は自衛権を否定しないので、自衛のための最小限度の武力行使は禁止されず、また、そのための必要最小限の実力組織を持つことは許されるというものである。また、日米安保条約については最高裁が、外国軍隊の駐留は九条の射程外であるとしている。

ここで問題としたいのは、九条が今しがた触れたような非戦を突き詰めたものという解釈しか許さないものであつて、政府解釈が九条をねじ曲げたものとしか言えないのかということである。実は、憲法の制定経緯を見ると、話はそう単純ではない。

ポイントのみ述べると、以下のとおりである。第一に、九条の大本となったマッカーサーの指示には、自衛戦争も含めて戦争は放棄することが明示的に述べられていたが、最終的に成立した九条には、この旨が曖昧になっている。

第二に、九条一項の国際紛争を解決する手段としての戦争放棄という文言は、不戦条約と同様である。そして、不戦条約は自衛戦争を禁止していない。

第三に、いわゆる芦田修正と文民条項である。これはちょっとテクニカルになるが、一応説明しておく以下のとおりである。芦田修正とは、議会での憲法案の審議の際に、後の首相である芦田均の提案によって追加された文言（資料下線部）であり、特に、二項の冒頭に「前項の目的を達するため」という文言を入れた点である。これによって、二項は、自衛ではない侵略戦争を放棄するという目的のために戦力を放棄するという意味にも読める。裏返すと、自衛のための戦力は許されるという解釈も可能である。もともと、政府解釈はこの解釈ではないが、いずれにしても、

こうした解釈を前提に、いわゆる文民条項が挿入された。すなわち、六六条二項であり、「内閣総理大臣その他の国務大臣は、文民でなければならない」という規定である。これは、芦田修正によって将来の再軍備の可能性が出てきたことを前提に、戦前のように軍人が大臣に就任して政治に影響を及ぼしたりすることを防止するためのものと言われる。

以上をまとめると、日本国憲法の前文や九条そのものをみると、非戦思想の徹底化という考え方が強く出てはいるのは確かであるが、他方で、国連憲章と合わせ考えれば、違う捉え方も可能である。また、憲法自体の解釈についても、今述べたような自衛戦争は認められるという考え方も顔を出しており、憲法制定時の理解は完全に一枚岩ではなかったということが知られる。

そうすると、政府解釈のように、自衛のための最小限度の実力組織を保有し、自衛のための最小限度の武力行使は九条からも認められるという考え方は、不可能な解釈ではないと思われる。

では、日米安保条約体制についてはどうだろうか。最高裁の砂川事件判決は、九条が禁止しているのは日本が保有する軍備であるから、外国軍隊の駐留は九条の禁止の射程外であると割り切った考え方を示した。そして、自衛隊を違憲だと考える立場であっても、日米安保条約については合憲だと考える傾向もあるようである。しかし、米軍は日本の意思によって駐留しているのだから、そんなに問題は簡単ではない。自分で軍を持つのは駄目だが、他国の軍に駐留してもらうのはよいということには簡単にはならないはずである。特に、アメリカの戦争に巻き込まれるリスクを考えれば、非戦の思想からは日米安保体制も違憲だと考えるのが素直であろう。

他方、九条の核心は日本が軍を十分に統制できずに侵略に走ってしまった戦前の反省を踏まえ、再び他国を侵略しないことを目指したものだとするれば、米軍の駐留を認めることは九条の射程外であると考えられ、日米安保体制も合憲ということになる。

四 おわりに

今のところでは、日本国憲法そのものの解釈としては、非戦すなわち、戦争放棄と軍備撤廃という考え方と読むのがもつとも素直であることは認められるものの、国連憲章と併せ考えれば、必ずしも非戦思想を徹底したものとはいえないのではないかと述べてきた。

そして、国連の集団安全保障体制が機能していない現実を踏まえれば、現実主義の論理に即して、自衛のための最小限度の実力組織を保有し、自衛のための最小限度の武力行使は九条からも認められるという考え方は、不可能な解釈ではないことも述べた。

そして、この、自衛のための最小限度の実力組織、あるいは自衛のための最小限度の武力行使というキーワードについて、実際にはどの程度のもので認められるのかということが問題になるが、これを予め固定的に示すことは困難で、結局、国際情勢を見ながら、民主主義のプロセス、すなわち国民的な議論によって決めていくほかないと思われる。その際に重要なポイントとして、三点あげておきたい。

一点目は、国民的議論の質である。これは安全保障問題だけでなく、年金制度とか教育制度のような国民全体に広く深く関わる国民的な政策議論の場合と同様であるが、十分な情報を踏まえ、専門家の力も借りつつ、国会内外で真摯な議論がなされなければならない。具体的には、今回の安保法案は政府の憲法解釈の変更が起点となっていたが、これについて十分な説明がなされていたかどうかが重要であった。

二点目は、自衛隊の統制の問題である。戦前の軍の暴走の反省を踏まえれば、自衛隊の活動を政府、さらには国会が十分に統制することが不可欠である。そして、そのことは自衛隊の活動範囲が広がれば広がるほど強く当てはまる。しかし、国会の統制能力は十分なのかどうか、改めて問い直さなければならない。

三点目は、一点目、二点目を通して結局、最終的な責任は国民にあるということである。先に、前文について、

「政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言」するところである。ここでは、政府の暴走によつて戦争が引き起こされないようにするために、国民主権つまり民主主義を宣言したのだということに触れた。戦前の日本は無謀な侵略戦争に乗り出していったが、そのもとの国民は独裁制の犠牲者であつたばかりではない。メディアの統制がなされたり、少数意見が弾圧されるなどして情報が不十分だったこともあるが、国民は、対外的な拡大を熱狂的に支持し煽つた側面があることも忘れてはならない。最終的には国民に判断の責任があるということを踏まえ、それを阻害するような表現の自由に対する侵害などについては、普段から警戒的でなければならぬ。

結局、この問題は最終的には市民社会の力量が試される。この点で示唆的なことをお話して終わりたい。第二次大戦は、自由主義陣営と全体主義陣営との戦争であつた。日本やドイツ、イタリアは、全体主義に向かう流れに抗しきれなかったのに対し、英米仏などは自由主義にとどまつた。とりわけ、地理的にヨーロッパから遠いアメリカや島国イギリスはさておき、フランスはヨーロッパ大陸の中心にあり、ドイツやイタリアのような隣国の影響でファシズムの脅威が大きかつた中、ふらふらしながらも何とか踏みとどまつたのは、結局、市民社会の力量に差があつたということだろう。一九三〇年代、軍靴の足音が聞こえる中で、反ファシズム・反戦活動を国際的に展開したロマン・ローンの活動が可能であつたフランスと、この種の運動が弾圧され、沈黙を強いられてしまつた戦前日本の市民社会との違いは大きかつたと言わなければならない。

（京都大学教授・憲法学）

ロマン・ロランの愛弟子

— ジャン・ド・サン＝プリ

ロマン・ロランが唯一、自らの「愛弟子」と呼んだ人にジャン・ド・サン＝プリがいる。私は昨年、ジャンの弟であるピエール・ド・サン＝プリの孫に当たる人物から、ロランがサン＝プリ家に宛てた手紙を六通、譲ってもらったことができた。そのうち三通を紹介しながら、ロランとジャンの交流の一端を振り返りたい。

書簡① 一九一九年二月二七日付（写真I）

ジャン・ド・サン＝プリは一九一九年二月一八日、二二歳の若さで世を去った。死因は当時、欧州各地で猛威を振るったスペイン風邪（インフルエンザ）だと見られる。本書簡はジャンの母と弟ピエールに宛てた慰めの手

紙である。みずず書房『ロマン・ロラン全集』の第三八巻に山口三夫訳で収録されている。

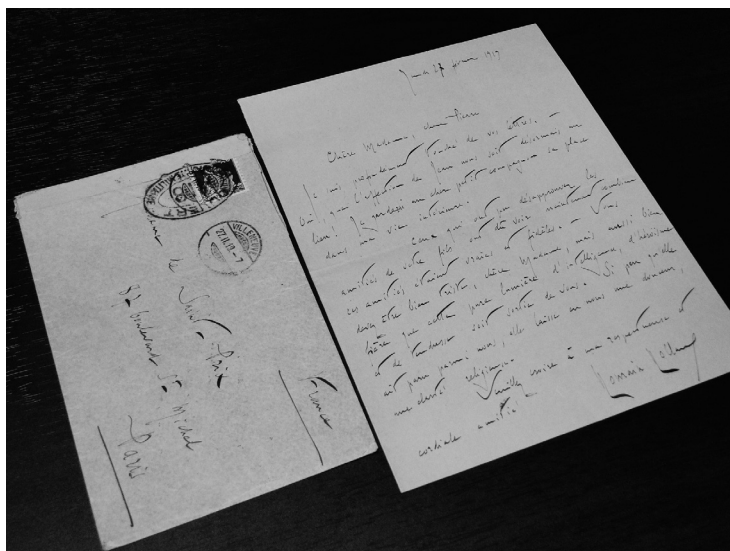
植松 晃 一

親愛な夫人、親しいピエール

あなたたちのお手紙に深く感動いたしました。

——そうです、ジャンへの愛情はこれ以後、わたしたちにとって絆です！ わたしはわたしの内面生活において親愛なかわいい道づれに場所を保つでしょう（中略）

あなたはひじょうに悲しんでおられますが、親愛な夫人、しかしまたこの知性、英雄精神、情愛の純粹な光があなたから出たことを誇りに思っておられ



写真Ⅰ 1919年2月27日付

るにちがいありません。それがわたしたちの間に現
われたのがいかにわずかであったとしても、この光
はわたしたちのなかに優しさを、宗教的な明るさを
残しています。

どうかわたしの敬意にみちた心からの友情をお信
じください。

ロマン・ロラン₁

ジャンは一八九六年生まれ。弟のピエールは一九〇一
年に生まれた。サン＝プリ家は南フランス出身の貴族で、
兄弟の父親はセーヌ州の裁判長次席を務めていた。母方
の祖父はドレフュス事件を解決に導いたエミール・ルー
ベ元大統領である。母親は熱心な平和主義者で、後にロ
ランの妹マドレーヌなどと平和運動に参加した。

ジャンはソルボンヌ大学の哲学科を卒業した英才だっ
たが、彼の素朴な人間信頼は第一次世界大戦により裏切
られる。ジャンは知人に次のように述べている。

「二八歳になるまで（*つまり第一次世界大戦の勃発

まで）、多くの人生は、人間への限りなく広い、全面的な信頼が放つ大光明に包まれて、輝かしく上昇していったのです。多くは人間の友愛を信じ、真理を信じ、人生を信じていました。世界が多くには、その進化の目標まちかまで来ているようにみえていたのです（中略）

現実、あの苛烈な平手打ちでよく答えました、——戦争でもって。なにもかも崩れ去りました。多くは一朝にして、もうなにごとにも信じなくなつたのです。〈真理〉〈革命〉〈理想主義〉——嘘だ、嘘だ、嘘だ！ 人間の生命を救いえないものは、卑怯な人間が現実を見ないですむようにでっちあげた致命的な虚偽にすぎず、愚弄、幻想にすぎないと思えたのです。現実とはもはや多くにとつて、人間の苦惱、人間の死でしかありませんでした²」

人殺しを正当化する嘘と腐敗のけがらわしさに、純潔なジャンの魂は窒息しそうだったに違いない。欺瞞が当然のものとして受け入れられていく社会にあつて、ジャ

ンは孤立感から逃れ、折れそうな心の支えを求めるように、愛読していた『ジャン・クリストフ』の作者であるロランを訪ねることを思いつく。一九一七年八月、ジャンは紹介者も立てずロランに手紙を書き、スイス・レマン湖畔のロラン家を訪ねた。

欧州の調和を訴え、「フランスの国民のほとんど全部が一致してドイツは憎いということとで神様に祈っているときに戦争に反対した」（加藤周二）ロランには敵が多かった。「ゲルハルト・ハウプトマンへの公開状」「戦いを超えて」など、一連の論説で世の中が聞きたがらない戦争の本質を突いたロランは、フランスで祖国の敵として憎まれ、叩かれ、裁かれた。「ロランを祖国の裏切り者とする見方は、世論の一部に限られたことではなかった⁴」と、仏文学者の村上光彦は述べている。ロランも指摘しているように、「過ちを犯した人々がそのため

に誇りに固執し、彼らの誤りを彼らに悟らせようと努める者を怨む⁵」ものののだ。

身の危険を感じる瞬間もあつたのだろうか。ロランは

友人のP・J・ジューヴへの手紙にこう綴っている。

「私たちは明日にも駆り立てられ、絞め殺されるかもしれません。そうしたことをすべて真正面から見つめなければなりません、身慄いしないわけにはいかなくとも（からだは、打たれた動物のように身慄いするでしょうが）、せめて精神の前進は何事によつて制止されても、乱されてもなりません。明日死んでもよいという覚悟で毎日を生きたのです。そして、同時に、永久に死んではならないかのように生きるのです（中略）われわれは「人間」の名譽のために、断固として立ちましよう！」（一九一六年七月一日付）

ただ戦争に反対しただけで、取り返しのつかない罪を犯したかのように、身近な人々からさえ敵意と憎悪を向けられる。その辛さは筆舌に尽くしがたいものだろう。戦争の本当の恐ろしさは、直接的に人間の生命を奪い、奪われることだけではない。「正義」や「平和」の旗のもと、多くの人々が自覚のないまま憎しみや欺瞞に生命

を蝕まれ、生きながら人間性を破壊されてしまうことだ。その毒気は感染力が強く、「窓から、戸の隙間から、印刷した紙から、大気から、思惟からのびこむのだ。いちばん敏感な人々は何も見ないうちに、何も読まないうちに、町に入っただけでそれを吸い込む。人によつては、いちどだけ、通りすがりに、触っただけで十分である」（『クレランボー』）。目の前の事実を正視・思考することができなくなり、集団ヒステリーを引き起こすこの病は、現代に到るまで克服されていない。「おお、狂気の人類！ いつも絶対にたいするこうした信仰があり、それは同じ陶醉に、しかし同じ不幸に、国家間の戦争の狂人ども、階級戦の狂人ども、そして平和の狂人どもをみちびくのだ！」（同書）

こうした状況の中、ロランは未知の若者を受け入れて語り合う。初めての出会いには、互いに深い印象を与えたジャンの弟ピエールは、二人の出会いを次のように伝えている。

「《わたしはこの若い青年に自分の姿を再び見た》と、ロマン・ロランは『戦時の日記』に書きとめる。

《彼の寛大な熱烈さはわたしをよろこばせまた苦しめる、なぜなら、わたしに二〇歳のころのわたしの幻想、わたしの苦悩を思い出させるからであり、わたしは彼に免じてやりたい多くの試練を予見する。》

ジャン・ド・サン＝ブリのほうでも、ルーズリーフに書きとめる――

《ぼくはロマン・ロランに、混乱したまま、自分のすべての苦しみ、フランスを締めつけていたあらゆる圧迫、人びとが埋没させられているあらゆる虚偽……を語った。彼はよく聴いてくれた。それから今度は彼がなおも希望するあらゆる理由を語った――

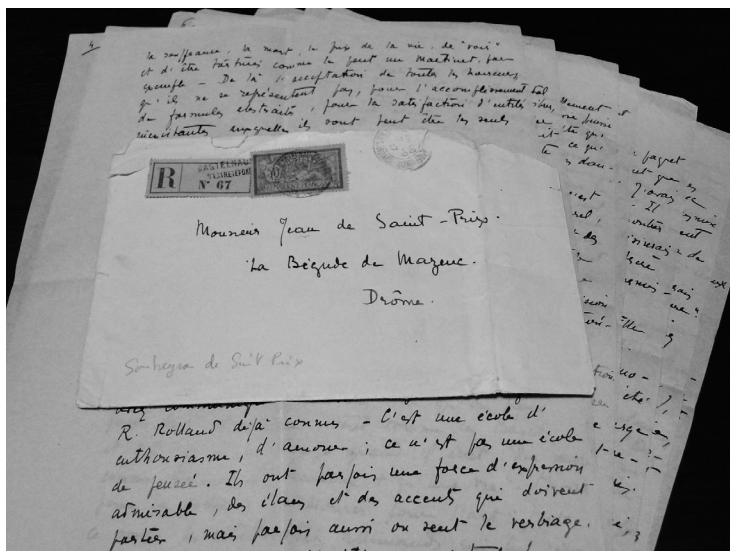
（後略）（中略）

ロマン・ロランのそばで、ジャン・ド・サン＝ブリは生きる希望と意欲を再び見出す――二〇歳の時には、この上なく絶望している者が自分はずっかり死んだのではないと感ずるためには、細い一束の光

が日々の夜を射し貫くだけで充分なのだ！ 彼は再び欲びを見出し、彼がスイスから帰ったとき顔の上には全く新しい欲びが輝いていた。」

ジャンの女友達が彼に宛てた手紙の中で、スイスにいるロランたちのことを「情熱と愛の学派」と呼んでいた（写真Ⅱ）。ジャンにとつては、まさにその通りだったのだろう。彼は新たな決意を込めてロランに書く。「わたしは気狂いたちのあいだで無関心でいられるものだと思つて来たのでした。でもその夢（イリュージョン）は一時的なものでした」¹⁰「世界的破産の前に、人びとは永遠に一体となるほがありません」¹¹

ピエールと共にアンリ四世校に学び、ジャンとも親交のあった仏文学者の小牧近江は、当時のパリの様子について、「一九一六年頃から、片々たる小雑誌が数多く発行されていましたが、そのほとんどは反戦思想の内容を盛つたものでした。ぜんぶで三六を数える種類があったといわれています。大なり、小なりロランの『争いの上



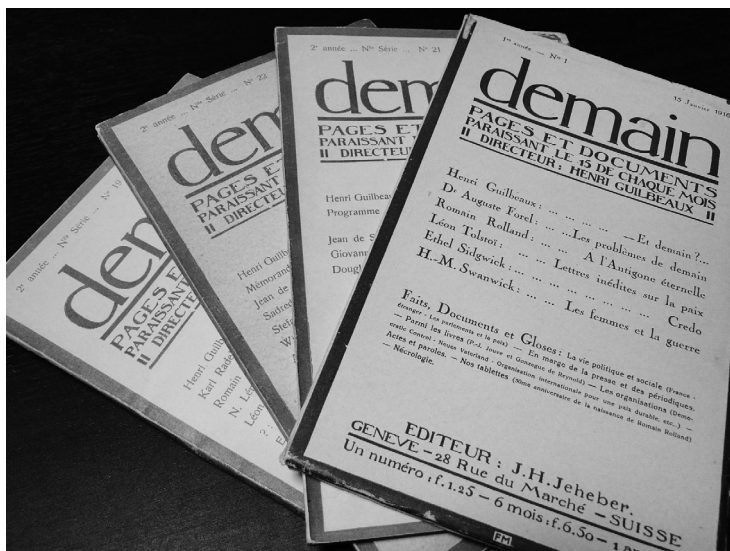
写真Ⅱ 女友達 (Jeanne Daste) がジャンに送った手紙 (1917年9月6日付)

にあれ〴〵の影響をうけたものです (中略) 私は、ジュネーヴ発行の『ドマン』(『明日』)を手に入れました。アンリ・ギルボー編集の反戦雑誌で、ロマン・ロラン、ラッセル、ルナチャルスキーなどが執筆していました¹²と伝えている。

ジャンはロランの勧めで、その『ドマン』誌に寄稿するようになる (写真Ⅲ)。同誌に初めて掲載された彼の論説「フランスの知識人について」にはこうある。

「政治家も知識人も我が身の保身だけから戦争に反対しないのだ。呪われた政治家、知識人よ、彼等は利権屋で、嘘つきだ。人民はまだ、女優や営利やえせ科学に汚れてはいない。人民は新鮮な空気を求めている。人民諸君、君たち自身の手で、この支配に終止符を打て。月給取りの学者などに、自分の行動理論をたずねたりするな。全身全霊をあげて行動し、考えるのだ」¹³

青年らしい、ムチのような言葉が並ぶ。ジャンはその



写真Ⅲ ロランやジャンが寄稿した『ドマン』誌

後も同誌に詩や論説を発表し、若手の反戦活動家として注目を集めていく。

時代の混迷を打ち破るためには、「揺るがしがたい善への意志をこれに立ち向かわせること」¹⁴が必要だとジャンは言う。彼はロランの友人マルセル・マルチネラと雑誌を創刊するなど、目覚ましい活躍を見せた。あまりに過激で性急な発言を憂慮した祖父（ルーベ元大統領）が、活動を控えさせようとする場面もあった。

ロシアで一〇月革命が成功すると、ジャンの行動はますます戦闘的になり、政府の監視を逃れるため地下に潜るようになっていく。しかし、その燃えるような魂は、決して強くない身体を焼き尽くそうとしていた。当時のジャンに会った小牧は、そのときの様子を次のように伝えている。

「思いなしか、ジャンの顔がひどく青白かった。そして、やつれていた。ただならぬことに思えてならなかった。それをみとめたのか、ジャンは笑顔をつくっていった。

「なあに風邪だよ。」

そのころ悪性感冒が流行しはじめていた¹⁵

一九一九年二月の凍えるような晩、無理をおして参加した社会主義学生たちの集会から帰ると、ジャンは高い熱に浮かされて床に伏せ、一〇日も経たずに逝った。享年二二歳。空高く舞い上がろうとしていた若鷺は、病魔により唐突に羽を折られた。

最後の数日の様子について、ジャンの母はロランに伝えている。

「最後の数日、彼は私に、またしてもあなたのことを話すのでした。彼は私に申しました、「ロマン・ロランがいま僕に手紙を下さなくても僕はそのほうがいいんです。だって僕は返事が書けないでしょう、病気がひどすぎて」。そしていつも、あなたにふたたびお目にかかりたいという彼の夢。……今では、あなたのほうへ心を馳せておりますのは、悲しみ悶えている一人の母親なのでございます。もし慰

めというものが一つでもありえますならば、あの子に對するあなたの温かいご理解こそは、私のこよなき慰めでございます¹⁶」

ロランは愛弟子を喪った悲しみを日記等に綴っている。

「今年（*一九一九年）という死の年はまた、私の最もすぐれた若い友の一人をも奪った（*ロランはこの年、最愛の母も亡くしている）。私の愛弟子ともいえる唯一の人（これは私のように、他人の自由にたとえわずかでも影響を与える、というようなことは決してしたくない人間にとつて、「弟子」という言葉が使えるかぎりにおいてであるが）、私の弟、私の思索の後継者であり、語り明かす相手である者——親愛なジャン・ド・サン＝プリである¹⁷」（一九一九年二月の日記）

「小公子ハムレットでありサン＝ジュストでもあった、われらのジャン・ド・サン＝プリは、われ

われの心に炎の航跡を残して、われわれのあいだを通り過ぎて行ってしまった、弱々しいが燃えるような青年であった」¹⁸（『先駆者たち』）

「私はフランスで、あんなに高邁な青年に出会ったことはかつてなかった（中略）詩的な、そして精神的なおびただしい力——ほとばしり出ようとして燃えたぎっていた創造的な血氣、自分の力に不相応な闘いと、愛する人びとおよび理想のための犠牲とに憧がれていた騎士的な本能、豊かな知性、いかにも若者らしい魅力、情熱のこもった、感じやすい、悩ましい心情。ああ！ この最後の六カ月のあいだ、劇、哲学、中篇小説、政治評論と、新しい作品を書くに書き、それらを二、三週間ごとに私に送ってくるほどに彼を駆り立てていた、熱をはらんだ性急さが、今にしてなんとよく分かることであろう。彼は自分の道程が短いことを予感していたのだ」¹⁹（一九

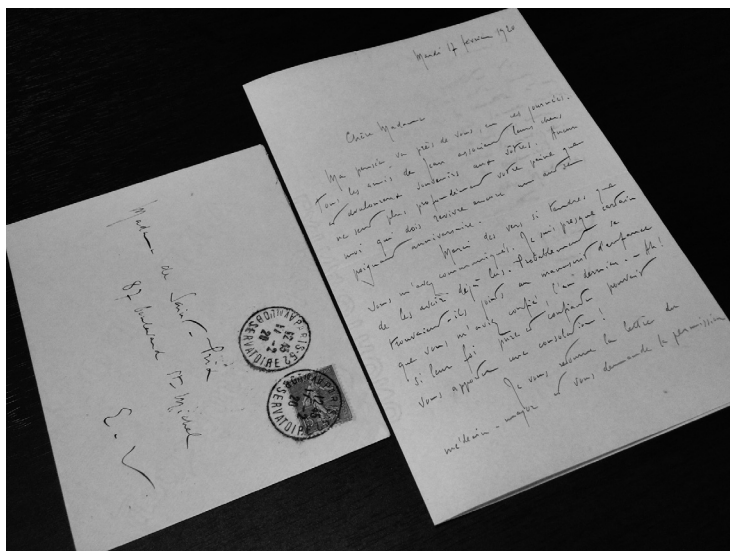
一九年二月一八日付の日記）

「現代の数かずの悲しみ、数かずの下劣さのさなかから、これほど清らかな花が咲きいでたというのは、奇蹟ともいふべきことであった（中略）苛烈で苦がにがしい経験に鞣なめされて古強者ふるつねものとなった年輩の男たちが、この後輩の前に立つては優しい敬意をこめて頭を垂れるのは、見るからに心のあたたまることとがらであった」²⁰（『アヴニール・アンテルナショナル誌 一九一九年五月刊』）

「彼のことを思えば思うほど、彼の死が私にはつぐないような喪失だと思われる。死ぬのが彼ではなくわれわれであるべきだったのに。われわれはわれわれの役目をいちおう果たしてきていた。そして彼は、私の息子のようだった。明日の道を照らすはずの、私の思想の種子だった」²¹（一九一九年四月二四日付の日記）

書簡② 一九二〇年二月一七日付（写真Ⅴ）

ジャンの死後もロランはサン＝プリ家との絆を守った。



写真Ⅳ 1920年2月17日付

ジャンの死から約一年後の一九二〇年二月一七日付の本
書簡では、まだ癒えぬ悲しみをジャンの母と分かち合い、
若い友を偲んでいる。

このところ私は、あなたのことをよく考えております。ジャンの友人たちは皆、彼を偲ぶやるせない気持ちをあなたのお心に重ねています。そんな友人たちの誰よりも、私はあなたの苦しみを深く感じています。私にとっては、また新たにづらい記念日を迎えなければならぬという気持ちです。

とても愛情のこもった詩をお送りくださり、ありがとうございました。すでに読んだことがあるものだと思います。おそらく昨年、私に託してくださいった、ジャンが子どものころに書いた草稿に入っていたのでしょう。ああ、その詩の純粹で信頼に足る信条があなたに慰めをもたらしますように！（後略）

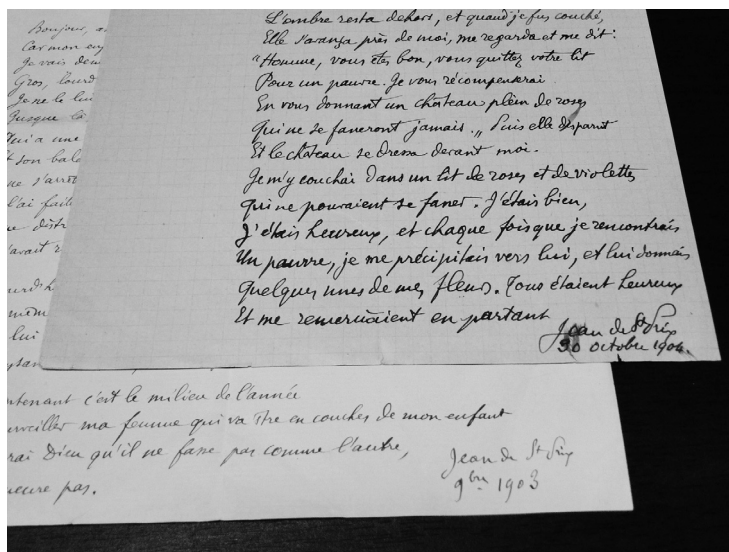
本書簡でロランが言及しているジャンの詩が具体的にどのようなものか分からないが、私の手元にはジャンが

七〜八歳のころ（一九〇三〜一九〇四年）に書いたと思われる詩の原稿がある（写真Ⅴ）。専門家の鑑定は経ていないが、書簡を譲ってくれた某氏に確認したところ、ジャンの詩稿だろうとの答えだった。

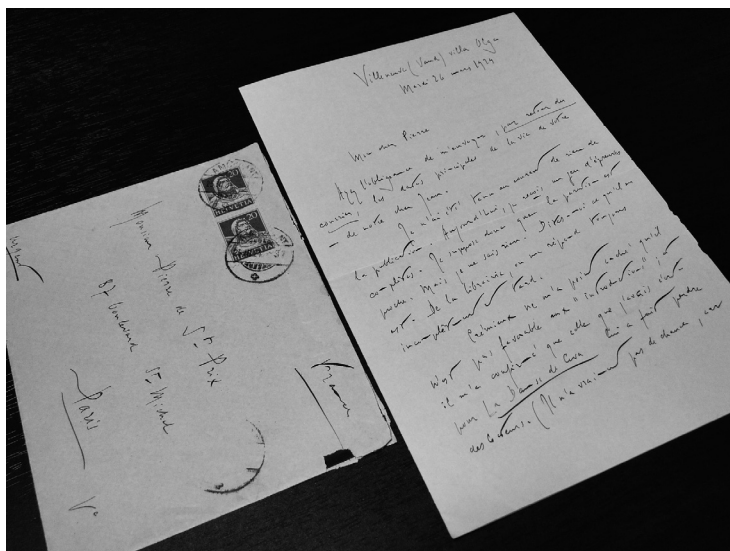
一九〇三年に書かれた詩は、一〇歳になる子どもを亡くした親の絶望と、新たな子どもの誕生という希望をテーマにしたもの。一九〇四年に書かれた詩「夜」は、乞食に慈善を施した男が、枯れることのない薔薇で飾られた城を女神に贈られるというおとぎ話風の作品になっている。

書簡③ 一九二四年三月二六日付（写真Ⅵ）

本書簡はジャンの書簡集が出版されることになり、ロランが序文を執筆するかどうかについてピエールに知らせたものである。出版社は読者が減ることを懸念し、ロランが序文を書くことに乗り気ではなかったが、ジャンの母のたつての願いにより、ロランは執筆を引き受けたようだ。



写真Ⅴ ジャンが書いたと思われる詩の原稿



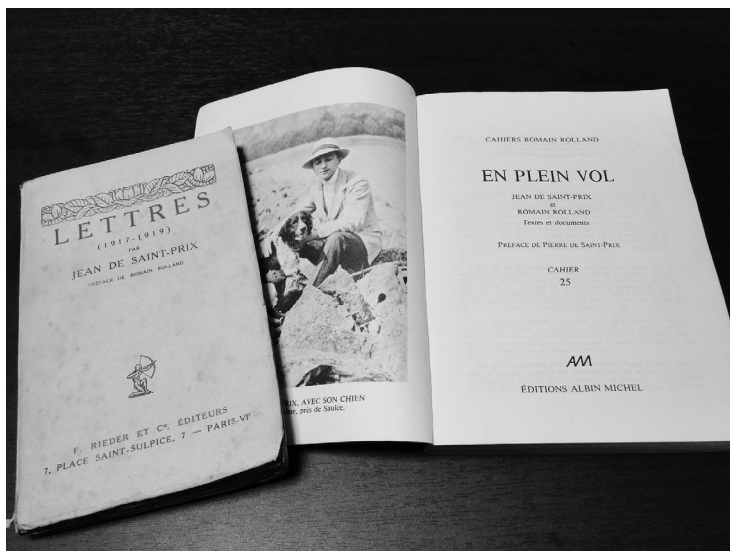
写真Ⅶ 1924年3月26日付

この手紙を受け取ったら折り返し、あなたの、いえ、私たちの親愛なるジャンの生涯について、主要な出来事を記したものを送ってくださいませんか（中略）まったく打算や党派性のない、純粹な親愛の情から出たものを、ほんの三〜四ページ書くことになるでしょう。私たちのジャンは、あらゆる卑俗なものを超えたところにいるのですから。

ジャンの書簡集は一九二四年五月、リーデル社から出版された（写真Ⅶ）。ロランの序文は愛情にあふれている。

「私が彼（*ジャン）に会ったのはほんの数日間、それも七年前の話だ。それ以来、彼の面影は片時も私の頭から消え去らない。まるで旅のひととき、一瞬の稲妻があたりの風景を金色に輝かせるように。重苦しい歳月が流れていく。しかし、束の間の光が一生を照らすのだ」

「二二歳で亡くなったこの少年は、一人の小さな英雄だったばかりでなく、鷲の飛翔力を持つ大きい



写真Ⅶ ジャンの書簡集(左)とロラン-ジャンの往復書簡集『飛翔中に』(右)

精神を宿していた。彼がそうした存在であったことは、その翼から落ちた羽毛ともいうべき彼の手紙が未来に向かって証明するだろう。世間の騒々しい評判と共に多くの作品が忘れられていくが、彼の名はこれらの手紙によって後世に伝えられる(中略)未来のシェリーたちは歌の途中で倒れた、美しい調べを奏でるこの若い兄弟の灰の上に、愛情を込めて跪くことだろう」

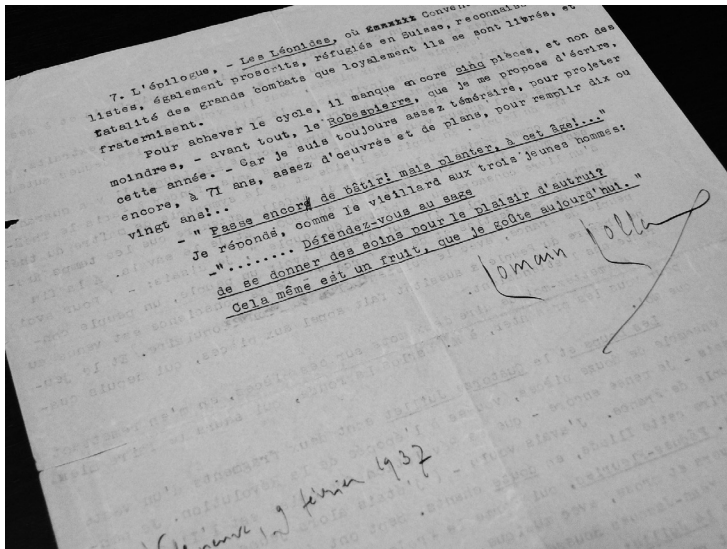
ジャンの書簡集にはロラン宛の手紙のほか、マルセル・マルチネやエミール・マッソンなどに宛てた手紙も収録されている。一九八〇年には「カイエ・ロマン・ロラン」の一冊として、ロランとジャンの往復書簡集『飛翔中に』が刊行された。

ロマン・ロラン研究所を設立した宮本正清は晩年、「ロランは老いをどうみてたんだろうね?」と語っていたという。昨年入手したロランのタイプ原稿(一九三七年二月九日付)では、自身の劇作について述べながら、

「私はまだまだ無謀ですよ。七十一歳になって、書きたい作品やアイデアが一〇年、二〇年分もあるのですから」と書いており、まったく老いを感じさせない（写真Ⅷ）。ジャンのような新たな世代の動向に常に気を配り、積極的に関わりを持つこともあったようだ。第二次世界大戦中には、対独レジスタンスの闘士たちを精神的に支えたことも忘れられない。そうした姿は、ロランが描くマルヴィータ・フォン・マイゼンブークの面影と重なる。

「マルヴィータほど若々しい精神を私は他に知らない（中略）マルヴィータの精神は、来る朝ごとのさわやかさを喜び迎える精神であり、若い人々のいろいろの希望を喜び迎える精神であった。それは、彼らのいろいろな大きなまくらみに信頼を用意しており、彼らの成功を観ると喜びに輝き、そして決して意気沮喪することはなく、もしも彼らが倒れたときには再び立ち上ることに力を籍す精神であった」²³

現在、世界には動乱の気配が満ちている。日本は平和



写真Ⅷ ラジオ放送のために用意されたロランのタイプ原稿

国家を自任しながら、非暴力による国家運営を可能にする方途を示し、リードする指導者を持たない。理想を忘れた現実主義は無策に等しく、避けようとした危険より深刻な危機を招くものだ。

第一次世界大戦中の一九一八年、ロランは友人に次のように書いた。

「もしも私がまだサン＝プリの年齢だったら、私の義務は異なっていたでしょう。私は青年のもっとも優秀な者たちが、政治と行動に関心をもたないことを残念に思いつづけております²⁴」

ロランの批判者が言ったように、あなたの大切な友人が殺され、愛するものを失う人が日々増えていくのに、戦場から遠く離れた安全な場所では戦争反対を唱えるのは卑怯であり、偽善ではないかという主張は、もっともらしく聞こえる。戦いが始まってしまった以上、苦しみと悲しみを最小限に抑える最良の方法は、早く敵を滅ぼして戦争を終わらせることだという理屈もそれらしく響く。

殺し合いが始まってからの反戦では遅いのだ。日々、人々の心に育つ狂気の芽を摘み取り、愛の種をまかなければならない。

戦乱の時代に、ロランとジャンは守るべき人間性をその肩に乗せ、クリストフォロスのように憎しみの河を渡った。私たちには、どのような河が待ち受けているだろうか。

「使徒の任務をもたぬ魂とは生なき肉体のようなものだ²⁵」(ジャン)

「イリュージョンよりも、真理よりも人間を愛さなければならぬ²⁶」(ロラン)

二〇一六年一月二九日

ロラン生誕一五〇周年の佳日に

(賛助会員・一九八〇年生まれ)

- 1 みずず書房『ロマン・ロラン全集三八』所収「ジャン・ド・サン＝プリへの手紙」山口三夫訳三七六頁
- 2 村上光彦訳『ロマン・ロラン全集月報三一』七頁
- 3 平凡社『加藤周一著作集二四』六八頁
- 4 ベルナル・デュシャトレ著／村上光彦訳『ロマン・ロラン伝』みずず書房四五五頁
- 5 みずず書房『ロマン・ロラン全集一七』所収「内面の旅路」片山敏彦訳五三八頁
- 6 みずず書房『ロマン・ロラン全集三六』所収「どこから見ても美しい顔」宮本正清訳一四〇頁
- 7 みずず書房『ロマン・ロラン全集五』所収「クレランボー」宮本正清訳二九〇頁
- 8 同四一八頁
- 9 みずず書房『ロマン・ロラン全集三八』所収「ジャン・ド・サン＝プリへの手紙」山口三夫訳三四八頁
- 10 小牧近江著『種蒔くひとびと』かまくら春秋社二〇頁
- 11 同二七頁
- 12 小牧近江著『ある現代史』法政大学出版局三六頁
- 13 北条常久著『種蒔く人 小牧近江の青春』筑摩書房一〇九頁
- 14 みずず書房『ロマン・ロラン全集三〇』所収「戦時の日記Ⅳ」村上光彦ほか訳一四九九頁
- 15 小牧近江著『種蒔くひとびと』かまくら春秋社三一頁
- 16 みずず書房『ロマン・ロラン全集三〇』所収「戦時の日記Ⅳ」村上光彦ほか訳一七六八頁
- 17 みずず書房『ロマン・ロラン全集三一』所収「日記抄」蜷原徳夫・村上光彦訳五五一頁
- 18 みずず書房『ロマン・ロラン全集一八』所収「先駆者たち」山口三夫訳二〇五頁
- 19 みずず書房『ロマン・ロラン全集三〇』所収「戦時の日記Ⅳ」村上光彦ほか訳一七六〇頁
- 20 一九六六年二月「みずず」第八卷一二号（ジャン・ド・サン＝プリ生誕七〇年）七九頁
- 21 みずず書房『ロマン・ロラン全集三〇』所収「戦時の日記Ⅳ」村上光彦ほか訳一八二二頁
- 22 ロマン・ロラン研究所「ユニテ一六」特集・宮本正清追悼号四六頁
- 23 みずず書房『ロマン・ロラン全集一七』所収「内面の旅路」片山敏彦訳四三二頁
- 24 みずず書房『ロマン・ロラン全集三六』所収「どこから見ても美しい顔」宮本正清訳二五〇頁
- 25 村上光彦訳『ロマン・ロラン全集月報三一』八頁
- 26 みずず書房『ロマン・ロラン全集五』所収「クレランボー」宮本正清訳四四四頁

テロのときのパリ

長谷川 和 宏

フランス人は、平穏な日常 la quotidienne tranquille を大切にする国民である。その日常が突然のテロによって破られた。このテロに遭遇したので、現地の様子を報告する。

平成二七年一月一日一六時五五分シャルル・ド・ゴール空港着。晩秋の鈍色の空をタクシーでパリへ向かった。変わらないセーヌの滔々とした流れを見下ろしながらバリ中心部へ入り、宿のラスパイユホテル Raspail Hôtel Montparnass (図一)に到着。いつもの習慣で、荷も開かず街へ出る。やや肌寒い程度で故郷の新潟と変わらない。既にとつぷりと暮れた街路は、黄葉のプラタナスが街灯に浮き立って並んでいる。モンパ

ラス通りを東に向かいリュクスンブル公園を通り抜けてカルティエ・ラタンに入る。聖ジュヌヴィエーヴの丘には、フランスの偉人たちが眠るパンテオンの大ドームとコリント式円柱が白く浮き立っている。ソルボンヌ大学の門を右に見ながらサン・ミッシェル通りを北へ進むと、程なくセーヌ川左岸に出る。そこから川上を望むと、輝くノートルダム大聖堂が夜の闇に佇んでいる。ノートルダムは、近づくにつれて荘厳な姿を益々あらわにしてくる。古い大扉を押し開いて堂内に入ると、天上から降り注いでくるような聖歌が流れていた。クリスマスチャンデはない私も思わず手を合わせて聴き入った。

翌一二日は、今回の旅の目的の一つ、欧州整形災害外



図1 パリ中心部地図、11月11日から13日の筆者の足跡

科雑誌編集集会である。アジア代表編集員として参加した。会議は、世界中の医学雑誌を扱っている大手シュプリング・パリ支社で開催された(図1)。最寄りの駅 Reaumur-Sébastopol でメトロを降りて少し歩くと支社のある古い建物に着いた。欧州、アジア、およびアメリカから計六名の委員が集まり déjeuner を挟んでの四時間ほどの長い会議であった。会議終了後、寒風の中をセーヌ川に向かってぶらぶらと歩き、ポンピドゥーセンターを経て、サン＝ルイ島の川岸に出る。ここからセーヌ右岸をゆっくりと西に向かって進んだ。美しい芸術橋(Pont des Arts)を渡りつつ川上を臨むと、サント＝

シャルベルの尖塔を真中に、シテ島が美しい(図2)。

一三日、長い歴史と最新の技術を集めた世界有数の脊椎生体力学研究所であるジョルジュ・シャルパーク研究所(旧パリ高等師範学校内)(図1)を訪れた。今回の二つ目の目的である。友人の施設長 Skalil 教授に施設を案内してもらい、その後、déjeunerを取りながら今後の共同研究について話し合った。午後は、我師 Dubouset 教授と面会し、様々な脊柱変形研究についての討論をした。夜は、Dubouset 先生宅(図1)での diner である。ご自宅はホテルから歩いて一五分くらいのところにあるので、夜七時四五分にホテルを出た。すっかり暮れたモンパルナスの石畳は、プラタナスの落葉が散り敷かれて美しい(図3)。通り沿いのカフェやブラッスリーでは窓越しに恋人達や、老夫婦、あるいはにぎやかな家族の夕食が始まったところである。いつもの金曜日の夜の景である。しばらく歩くと、Église val-de-Grâce が通りの向かいに美しいドームを見せている。モンパルナスの繁華街から遠ざかるにつれて、人通りも少なくなり、パリの冬らしい北風が身に染みる。Dubouset 先生はマン



図2 11月12日、芸術橋からシテ島を臨む



図3 11月13日、モンパルナス通りの夜

シヨンの玄関まで迎えに出てくれた。世界的に有名な大先生であるが、御自宅は実に質素で、リビングには仕事用のパソコンや趣味のステンドグラスなどが置かれている。小さな厨房では奥様が手料理の仕上げに余念がない程なく今日お会いしたSkali先生御夫妻も合流してdinnerが始まった。日々の出来事、文化、フランスの歴史、チーズやワイン、さらには日本の映画のことなど話題は尽きない。すると、夜九時過ぎ頃、Skali先生の娘さんから郊外のサッカー場で爆発があったとの電話があった。電話を切ると、すぐ又、電話が鳴り、今度は一〇区、一九区、一一区で次々と爆発や銃撃があったとのこと。どうもテロらしい。ラジオをつけると、一〇人以上の死者がでているらしく、一月のCharlie-Hebdo新聞社襲撃事件が皆の頭をよぎった。実際はこれをはるかに凌ぐ惨事が起きていたのであるが、詳細は知る由もなかった。^{*}その後、テロや社会情勢の話題で晚餐は一時過ぎまで続き、Skali先生の車でホテルにお送り頂いた時には、一二時近くになっていた。テロの現場は、歩いて二〇分程度のところであったが、モンパルナスの夜は、

妙に静かであった。この頃、フランス国家警察特殊部隊が、最大の犠牲者を出したバタ克蘭劇場への突入作戦を実行する直前であった。

* テロの詳細

* 二二時二〇分ーパリ郊外のスタッド・ド・フランス（サッカー場）で爆発。市民一名、自爆テロ犯一名が死亡。

* 二二時二五分ーパリ市一〇区のカンボジア料理店「ル・プティ・カンボージュ」とバー「ル・カリオン・バー」の付近で、武装グループが発砲、一五名が死亡、一〇名が重傷。

* 二二時三〇分ースタッド・ド・フランスで二度目の爆発。テロ犯が死亡。

* 二二時三二分ー一九区のビザ店「ラ・カーザ・ノストラ」付近で、武装グループが発砲。五名が死亡、八名が重傷。

* 二二時三六分ー一一区シャロンヌ通りの喫茶店「ラ・ベル・エキップ」付近で、武装グループが発

砲。一九名が死亡、九名が重傷。

* 二二時四〇分頃ー一一区ボルテール通りのレストラン「ル・コントワール・ボルテール」付近で自爆テロ。一名が重傷。同店テラス席に座り自爆し、客九人が負傷。

* 二二時四〇分ーバタ克蘭劇場へ武装グループが発砲し押し入り、立て籠り。

* 二二時五三分ースタッド・ド・フランス付近で三度目の爆発。テロ犯一名が死亡。

翌朝、ニュースを見てやつと事件の全容が判明した。

一〇〇人以上の犠牲者が出て、戒厳令が布かれていることも、このときに初めて分かった。帰国が少々遅れたものの、無事に帰れたことは幸いであった。別の世界のことと思っていたテロは、対岸の火ではなく、すでに我々の身近に迫っている。テロの根本的問題はどこにあるのか？ 権力とは何か？ 国家とは何か？ 宗教とは何か？ フランス人は、人権宣言において「他人を害することのない全てをなし得ること」を「自由」と定義（第

四条) したのではなかったか? 様々な疑問が頭を去来した。一月一日、Saint-Denisで、容疑者の関係先を家宅捜索中に警察官と数人の男の間で銃撃戦が発生した。この銃撃戦で自爆死亡したフランス人の少女がいた。彼女の友人は、「あなたや私と同じ普通の女の子だったわ」と語ったという。なぜこのように人間は変わり得るのか? 一一区で一九人が犠牲となったラ・ベル・エキップでは、ガラス窓に空いた銃弾跡に一輪の薔薇が挿され、“Au nom de quoi?” というメッセージが残されていた。実に悲しい一輪の薔薇である(図4)。「何の名において、このような行爲が行われ得るのか?」という意味であろうか。二〇世紀の偉大なヒューマニストの一人であるシュヴァイツァー博士は、『私の人生と考察 *Ma vie et ma pensée*』のエピローグで、「説明できないほど不思議で苦悩に満ちたこの世の中に、人間精神の荒廃したこの世の中に、生まれ出たのであるから、私は生の尊厳を見出すために出発しなければならない」(筆者訳)と記述している。複雑な世界情勢の中で、テロリズムの本質を見極めるのは極めて難しい。ほとんど不可能に近い。

しかし、我々一人一人も又、生の尊厳について考えなければならぬ。この自覚が全ての出発点であるという気がする。

かつて、ロマン・ロランは、「生の虚無感を通過した危機に、私の内部に無限の生の火を点じてくれたのはベートーヴェンの音楽であった」(「幼き日の思い出」と回顧している。今こそ、ベートーヴェンの言葉を思い出し、『第九交響曲』を皆で合唱すべきときではないだろうか。「神からは一切が清らかに流出する。私が幾度か情念のため悪へ混迷したとき、悔悟と清祓を繰り返し行うことによって、私は、最初の、崇高な、清澄な源泉へ還った。——そして、『芸術』へ還った。そうすると、どんな利己欲も心を動かしはしなかった。常にそうあってくれろ」といふ。樹々は果実にたわみ、雲はさわやかな雨に充ちるときに沈降する。人類の善行者たちも自分の豊かな力に傲りはしない。もしも重い睫毛の下に涙が膨らみ溜まるならば、それが溢れ出ないように、つよい勇氣をもってこらえよ。歩む道は、あるいは高くなり、あるいは低くなり、正しい道の見究めがたいこの世の旅路



図4 パリ同時多発テロで襲われたレストラン「ラ・ベル・エキップ」の窓ガラスに残された銃痕に差された花とメッセージ（パリ、2015年11月14日、クレジット：ゲッティ／共同通信イメージズ）



図5 フランスの友人から送られてきた三色旗に彩られたエッフェル塔の写真

において、お前の足跡は確かに坦々たるものではないであろう。しかし徳の力は、つねに正しい方向へお前を前進せしめるであろう」（ペートーヴェンの『手記』より）
片山敏彦訳。

帰国後、フランスの友人から三色旗に彩られたエッフェル塔の写真が送られてきた（図5）。そのメッセージは、自由 *Liberté*、平等 *Egalité*、友愛 *Fraternité* であることは言うまでもない。彼らがそのフランス精神を堅持し続けると信ずる。

（賛助会員・医師）

読書会報告

清原章夫

ロマン・ロラン研究所、月例の読書会は、二〇一四年四月から二〇一五年五月までかけて、『ロマン・ロラン

伝』（ベルナール・デュシャトレ著、村上光彦訳、みずず書房

刊）を読了した。生涯にわたって音楽を愛したロランの伝記なので、随所に音楽が溢れていた。そこで、伝記の内容に関連した音楽を私が選んで、その曲のCDを読書会の討論の合間に、みなさんと一緒に聴くことにした。

その中で、最も参加者に好評だったのが、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ第三十二番作品一一一をユーラ・ギュラーの演奏で聴いた二〇一五年四月二十五日（土）の第三二八回（五〇三回）の読書会だった。

その時に、私は以下のように解説をさせていただいた。

読書会の雰囲気が、『ユニテ』の読者に少しでもお伝えできれば幸いである。

第七章 ヴェズレー 一九三七—一九四四

一九四四年二月二十四日、ロランの友人、ブイエ夫妻がミジエンヌから自転車で、八〇キロも離れたヴェズレーにロランを訪ねてきた。その夜、ロラン夫人のマリーは、母親に付き添って深夜のミサに出かけた。

ロランは、ブイエの肩に手をのせて、「リュシヤン、手助けをしてくれたまえ……。わたしたちのミサを挙げにいこう！」と言い、彼の腕にすがって大階段を下りた。

「彼はピアノに向かって腰を据えた。その顔は光り輝いていた。ブイエ夫妻は心底から感動して息を詰めた。

すぐさま、『ソナタ作品一一』だとわかった。まず第一楽章が、冷え冷えと鎮まり返った絶望の立ち込める嵐を引き連れて進行した。長い、力強い指が、ためらうことなく鍵を探り当てていった。肉の落ちた両手がしきりに動き、ひきつり、鍵盤を締めつけた。ロランはこの音楽に運ばれるうちに「黙示録」の四騎手のひとりになりきっていた。顔をしかめ、口をひきつらせ、切れ切れの言葉を漏らした。しかしやがて、この言い表しようのないドラマは、第二楽章「アリエッタ」とともに静穏に到りついた。ロランの魂は彼の英雄の魂とびったり寄り添っていたから、二人の聴き手にはその反響が聞こえてきた。二人が感じたことを言うなら、ロランは死から解放たれて——そのまなざしで数えきれない深淵を測定してきた人のように——彼の心のうちに〈主〉の永遠を穏やかに確信していたのだ。

最後の幾小節かとともに歌は消えうせた。ロランは、友人たちに目を向けた。力を振りしぼり尽くして疲れ果

てた両腕が垂れ落ちて支えを求めた。」（『ロマン・ロラン伝』四三二頁）

そしてロランは、この演奏で人生における仕事をすべてやり遂げたかのように、六日後の一二月三〇日の夜一時に逝去した。

まるで『ジャン・クリストフ』に出てくるような崇高な場面である。さて、ロランはなぜ人生の最後にこの曲を演奏したのだろうか、そして、彼はどのような解釈で弾いたのだろうか、私は自分に問いかけてみた。

最初の疑問の答えは、ロランの以下の記述が明らかにしてくれた。

「作品一一一のソナタは、取りもどされた力の作品である。これは岩塊のように、玄武岩の山のように聳えたっている。その二つの斜面の、一つは力の充実、もう一つは清澄のそれだ。事実、ベートーヴェンの作品の中でも、これほど壮大な、これほど完璧な実体的なものの統合を見せているものはない。

……作品一一一は、ライオンの如く、戦いに備えてその

エネルギーを集中するが、与えられた恩寵によって、闘いをすることなく、平和の約束の地に、その天幕を設ける。

これらのピアノ・ソナタは、『ミサ』の偉大な史詩の儀仗の役を勤め、これを補足する。「アグヌス」の中で、空しく祈り求められた平和は、作品一一の「アリエッタ」の上に降り、これを満たす。ベートーヴェンが、これほどの単純な荘嚴さの中に、彼の充実を実現するのは、今までもなかったし、今後もないだろう。」「(ロマン・罗兰全集二四卷 ベートーヴェン 偉大な創造の時期』三〇一、三二〇頁 吉田秀和訳 みすず書房一九八〇年)

さて、次の問いは難しいように思えた。なぜなら、罗兰のピアノ演奏は録音に残されておらず、罗兰自身の音楽に関する著作や、シュテファン・ツヴァイクらのように実際に罗兰のピアノ演奏を聴いた限られた人たちの証言に頼るしかないからだ。

それでも私は、これまでに聴いた作品一一の実演やCDの中から迷わずに、ユーラ・ギュラーの演奏した奇跡のような録音を思い出した。

ユーラ・ギュラー (YOURA GULLER) は、一九九五

年五月一六日に、ロシア人の父とルーマニア人の母を両親としてパリに生まれた。四歳で楽譜を読み、幼い頃から神童として有名だった。パリ音楽院を一二歳で一等賞を得て卒業し、すぐにピアノリストとしてのキャリアをスタートした。彼女は第一次世界大戦前に各国でリサイタル、コンチエルトの奏者として高く評価された。ヴァイオリニストのジャック・ティボーは彼女を「音楽の女神」と呼んだ。また、彼女はすばらしく端麗な容姿で知られ、映画界から熱心な勧誘を受けたほどであった。

第一次世界大戦後も彼女の栄光の時代は続き、その演奏は作曲家のラヴェル、ミヨー、チェリストのカザルス、ピアノリストのバックハウス、ハスキル、ホロヴィッツ、指揮者のアンセルメ、そして理論物理学者のアインシュタインたちから絶賛された。

そして、罗兰もギュラーの実演を聴き、時に彼女の演奏する、ベートーヴェンの作品一一を含む、後期ソナタを高く評価していて、以下の言葉を残している。

「マダム・ユーラ・ギュラー、貴女の演奏の思い出に敬意を表します。私の希望は、ベートーヴェンの最後の



ユーラ・ギュラー

ソナタを、再び、貴女の演奏で聴くことです。貴女の解釈は現代において比類のないものです。」

だから、ロランが最後にこのソナタを弾いたとき、彼女の演奏を規範にしたことは、容易に想像ができる。

第二次世界大戦が始まると、彼女はユダヤ系だったため、演奏活動を完全に停止させられた。同時に病魔が彼女を襲ったため闘病生活を余儀なくされ、その長い空白期間に彼女の名前は世間からほとんど忘れ去られた。そして、彼女は華麗な伝説に包まれた過去のピアニストになった。

しかし、ギュラーは、一九五五年に二〇世紀初頭の演奏様式を継承する幻の女流ピアニストとして、パリでの演奏を皮切りに楽壇に復帰した。一九六五年〜六六年のシーズンにはロンドンのリサイタルで絶賛され、

一九七一年二月には
ニューヨークのカ
ネギー・ホールでリ
サイタルを開いた。
その後、世界各地
でコンサートを開催

し八〇歳のころには、日本でも演奏したい意向を持っていたが老齢のため果たせなかった。晩年は、スイスに住んでいたが、一九八〇年十二月三一日にミュンヘンで八五歳の生涯を閉じた。

このCDは一九七三年、ギュラーが七八歳の時にパリのリバン聖母教会で録音された。ピアノはスタインウェイを使用している。

演奏はすばらしく、ロマンティックなピアニストと評されていたギュラーだが、ベートーヴェンの古典的な面を明確に表現している。第一楽章の力強さは、とても七八歳だとは思えず、第二楽章は対照的に、晴朗で魅惑的な主題が奏でられ、それから各変奏に自然につながる。そして、ソナタ全体にあらわされた、ベートーヴェン自身が演奏しているような、深い精神性こそが、ロランの理想だったと思われる。

この演奏を聴くとベートーヴェンの言葉、「心より出で、願わくば再び心にいたらんことを。」と「悩みを突き抜けて歓喜にいたれ！」が思い起こされる。

短 信

*森本達雄さん（当研究所顧問、名城大学名誉教授） 『原典で

よむ タゴール』を岩波書店で翻訳・出版されました。ご健康状態のすぐれないなか、精力的なお仕事に敬意を表したいと思います。

*加藤敬事さん（みず書房前編集長） 今日朝日新聞夕

刊（二〇一五・六・一）バイオリニスト庄司紗矢香さんの記事に二三歳の時に読んだ『ジャン・クリストフ』の話が出てきます。こんなふうに影響を与え続けているんですね。

——「このところ、プログラムには必ずベートーヴェンを入れるようにしている。のめりこんだのは、実は音楽ではなく小説から。ベートーヴェンをモデルにしたロマン・ローランの『ジャン・クリストフ』を二三歳で読み「抗い難く降りてくる崇高な力」に心奪われた」——と。

*竹本浩典さん（当研究所評議員） 情報通信研究機構から

千葉工業大学の音声工学の教授として赴任、長年の希望がかなえられ喜ばしく祝意を表したい。が住み慣れた関西圏から関東圏へ夫人の能田由紀子さん（当研究所理事）ともに引っ越しされるので、ちょっぴり淋しい。

*能田由紀子さん 大学時代から二五年も住み慣れた京都

を離れるのは寂しいですが、どこにいてもロマン・ローラン

がそばにいてくれるので、新天地から研究所を応援させていただきます。

*位田隆一さん（当研究所理事） 京都大学名誉教授で同志

社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科特別客員教授が滋賀大学学長に四月一日から就任。多くの要職についておられる氏のますますのご健康とご活躍を祈念する。

*長谷川治清さん（当研究所理事・前同志社大学ビジネススクール教授・イギリス在住） 今日、やっと、戦死した父から母

への葉書を全部整理し終え、タイプ打ちにすることが出来ました。全部で、一二六通でした。偶然に、彼からの最後の葉書は一九四四年四月二十八日（私の誕生日）に書かれたものでした。私がその日に一年を迎えた旨が、「今日は四月二十八日治清の一誕生の日だったね。おめでとう。大いに御馳走をしてやったことだろうね」と書かれてありました。戦死したのは同年一〇月一〇日でした。戦死した父を色々想いながらも、この手紙の整理を終えることが出来てほっとしております。

イギリスの最近の天候は雨と強風の毎日で気分も晴れません。ズンバや、水泳、散歩、ガーデニングなどで何とか健康を維持しております。日本でお会いできるのを今から楽しみにしております。

*西成勝好さん（当研究所理事長・中国湖北工業大学教授）

二〇一五年には嬉しいことがありました。日本の大学の学生さんが大学院の論文にロマン・ロランをテーマにしたいとの知らせがありました。相変わらず中国の大学の大学で理系の研究教育に勤しんでおります。日本で憲法学者やシールズなどの危惧をよそに、首相が強引に進めようとしている時に、理系の専門に閉じこもり研究教育に勤しんでいて良いのかと心配にもなります。日本では「爆買い」が報道されましたが、旅行を通じてでも多くの人の交流が進めば、戦争等にはならないと期待したいところです。

*西垣正信さん（ギタリスト） 恒例のクリスマスコンサートにラベルの『ボレロ』のほかに宮本正清先生の「戦争が

おしまいになった」の詩に作曲し、朗読を村田まち子さんをお願いしたく思っています。この詩は「読み聞かせる戦争」日本ペンクラブ編（光文社）二〇一五年新装版に収録された二七作品の一作品となっているのを発見してとてもうれしく思っています。平和への永遠の思いを一層身近な実感として心を込めて作曲したいと思います。

*徳永勲保さん（妙光寺責任役員、公益財団法人藤井有鄰館評議員）

〈中村内蔵助居屋鋪絵図〉について

現在京都市歴史資料館にて〈古地図のいろいろ〉展が開催されています。一七一四年京都銀座關所事件で追放となった内蔵助屋敷、約七〇部屋、七五〇畳が競売に付されました。

府立総合資料館に収蔵されているその絵図を二〇年前、わたしが映写、複写、復元したものが展示されています。尾形光琳最大のパトロンで光琳もたびたび出入りした屋敷の図を見ていただければ光琳の新たな視点が生まれるかと思います。この展示を契機に徳永さんの作品がアートライフみつはしで「九九拙展」と称して開催されました。

十 訃報十

下郡 将宏さん

二〇一五年八月三日、肺炎のためご逝去、八七歳。お若いとき夫人の由さんに『魅せられたる魂』の読書を薦め、由さんの愛読書に加えられたご縁で四半世紀ぶりにご夫妻で研究所活動にご参加くださり熱いご協力をいただきました。合掌。

寄 贈

西宮在住の北村公宏さん（元大阪サンケイホール総支配人）二〇一五年一月一七日、高田博厚作ロマン・ロランのブロンズ肖像をお持ちくださり寄贈くださいました。すでに研究所にある像と一緒にベアーで末永く愛蔵させていただきます。心から感謝申し上げます。

財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書

設立者・初代理事長 宮本 正清

ロマン・ロラン（一八六六—一九四四）は、日本人にもっとも強く深い、精神的、道徳的影響を与えたヨーロッパの芸術家の一人であります。武者小路実篤、志賀直哉等の白樺派の人々をはじめ、高村光太郎、尾崎喜八、大仏次郎、小島政二郎その他の作家、音楽家、画家、彫刻家、さらに科学者、実業各方面にいたるまで、その青春時代をロマン・ロランの思想、芸術の光に照らされ、人格的感化陶冶を受けた者は枚挙にいとまないであります。

しかし、ロマン・ロランの真の偉大さと、存在価値は、たんに文学的分野にとどまるのではなく、むしろその博大な人間愛にあります。人種、文化、文明等のあらゆる国境を越えて、真に世界的、人類的爱である彼の愛の精神は、「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」その他の小説、戯曲、伝記、文学的、音楽的、歴史的研究のみならず、現代社会のあらゆる不正と戦うために、人権と自由を擁護するために、多くの政治的、社会的論争を生涯つづけました。さらに、ロランは、東洋と西洋、ヨーロッパとアジアとの相互理解、信頼、尊敬と両者の協力が、人類の進歩と平和のために、いかに必要であるかを説き、われわれの文明を墮落と頹廢から救いうる唯一の道は、アジアとヨーロッパが、あたかも車の両輪のように支持し合い、各人種、各国民がユニークな文明、固有の伝統を尊重、保存して、人類全体の偉大な共有財産として、現存のそれに勝る大文明を創造すべきだと言っております。ロランは、インドの哲学、宗教を研

究した数巻にわたる著述の中で東洋の精神のもっとも深遠で高邁なものは、西洋のそれと本質的に異なるものでないばかりか、両者がほとんど完全に一致していることを実証しております。このような思想家、芸術家、偉大な人間が、わが日本において、半世紀以上にわたって、変ることなく、今もなお、青年層に親しまれ、愛読され、尊敬されていることは、日本のために、喜ぶべきことと信ずるのであります。

一九七〇年十二月

◆現在の主な三つの活動

ロマン・ロランセミナー

公開講座

- 講演会
- 読書会・研究会
- 機関誌『ユニテ』発行

◆ロマン・ロラン研究所賛助会員について

- ロマン・ロランの著作に感動、また
- 彼の周辺の芸術家たちに興味、
- あるいは、ロマン・ロラン研究所活動に共感
- いずれの理由でも結構です。皆様のご賛同をお待ちいたしております。
- 特典①機関誌『ユニテ』の配布。②賛助会員の参考に資する情報、資料等の提供。③公開講座無料。
- 会員①一般賛助会員は年会費一口五千円から。特別賛助会員は年会費十口以上。

ロマン・ロラン研究所の活動

一九七一	5・15	ロマン・ロランと日本の青年（映画『ロマン・ロラン』上映）	宮本 正清	一九八九	4・20	ロマン・ロランの反戦思想と現代	加藤 周一
	11・27	苦悩のなかのインド	森本 達雄	6・9	6・9	ロマン・ロラン全集と私	小尾 俊人
一九七二	6・24	ロマン・ロランとフランス革命	波多野茂彌	9・29	9・29	ロマン・ロランの革命劇から——フランス革命二〇〇周年の記念に	中川 久定
一九七三	5・26	ロマネスク美術 ブルゴーニュ地方の教会を中心にして	高井 博子	11・17	11・17	ロマン・ロランとの出会いから	尾埜 善司・今江 祥智
12・18		私の人間観	末川 博	一九九〇	1・27	ロマン・ロランに負うもの——平和と音楽	新村 猛
一九七四	6・29	私の通った芝居の道	毛利 菊枝	6・2	6・2	ロマン・ロランとガンディー	森本 達雄
12・5		ロマン・ロラン没後三十周年記念——講演と音楽の夕べ	佐々木斐夫	9・26	9・26	『魅せられたる魂』と私	樋口 茂子
			演奏…玉城 嘉子	10・26	10・26	占領時代における日本社会とロマン・ロラン	小尾 俊人
一九七六				11・30	11・30	ロラン・片山・ヘッセ	宇佐見英治
7・11		ロマン・ロランとゲーテ ユダヤ民族と西洋文明	岡本 清一	一九九一	3・1	ロマン・ロランと私	松居 直

4・19	(財) ロマン・ロラン研究所設立二十周年記念 レクチャー・リサイタル 杉田 谷道	10・15	『魅せられたる魂』を語る(後)	重本恵津子
6・4	ベートーヴェン後期ピアノ・ソナタの夕べ ロマン・ロランとベートーヴェン 青木やよひ	1・28	いま、ロマン・ロランを語る 尾埜 善司・今江 祥智	
9・27	ロマン・ロランとデュアメル 村上 光彦	9・9	ロマン・ロランと音楽 中野 雄	
10・25	ロマン・ロランの思想の二面性 兵藤正之助	10・14	神秘と政治 ロマン・ロラン、その思索と行動の あいだ B・デュシャトレ	
11・29	初めにロマン・ロランあり 岡田 節人		ロランとフランス革命 河野 健二	
一九九二			自然科学とゲーテ 岡田 節人	
6・26	〈大洋感情〉と宗教の発端 岩田 慶治	12・3	ロマン・ロランとドイツ音楽 岡田 暁生	
9・25	ロマン・ロランとイタリア 戸口 幸策		ベートーヴェン、デユカ他作品 ピアノ演奏…小坂 圭太	
10・30	ロマン・ロランの革命劇をめぐって 鶴見 俊輔		おはなし「ピエールとリュス」と「また逢う日まで」 で 今江 祥智	
11・27	宮本正清 没後十年記念追悼会 ピアノ演奏…山田 忍	12・24	映画上映「また逢う日まで」(監督 今井 正)	
	静かにやさしき顔 佐々木斐夫			
	不思議な静けさ―宮本正清の世界 小尾 俊人			
一九九三		一九九五		
1・29	自伝的諸作品について 佐々木斐夫	1・27	ロマン・ロランと日本人たち 小尾 俊人	
1・29	ロマン・ロランの演劇的世界 石田 和男	6・2	私の歩んだフランス文学の道 片岡 美智	
5・24	ガンディーとロマン・ロラン 山折 哲雄	11・10	ロマン・ロランとR・シュトラウスの周辺 岡田 暁生	
6・23	『魅せられたる魂』を語る(前) 重本恵津子			

一九九六	6・14	11・16	11・18	一九九七	1・17	6・6	9・19	10・4		一九九八	6・8	9・25										
ロマン・ロランとの出会いから	鄭 承姫	レクチャーコンサート	ベートーヴェン…ピアノソナタ 第21番、28番	ピアノ演奏…北住 淳	「戦間期のリベラル」経済学から見たロマン・ロラン	「主体的精神と普遍的人間愛」ロマン・ロランと	魯迅	わが青春と一生	ロマン・ロランと結核の時代	ピアノとチェロのための夕べ	ロマン・ロラン記念コンサート	チェロ演奏…小川剛一郎	ロマン・ロランと種蒔く人	柏倉 康夫	ロマン・ロランと政治的魔術からの解放	柳父 関近						
10・30		11・25	一九九七	6・11	10・8	12・1	二〇〇〇	10・13	二〇〇一	2・23	6・23											
ロマン・ロラン記念コンサート	ピアノ演奏…小坂 圭太	レクチャー…岡田 暁生	ロマン・ロランと大佛次郎	村上 光彦	ロランと音楽	「日本ロマン・ロランの友の会」五十周年記念	園田 高弘	「園田高弘ベートーヴェンを弾く」	お話とピアノ演奏	ロマン・ロランとインドの精神	森本 達雄	ロマン・ロラン没後五十五年と日本	佐々木斐夫	ロマン・ロランと《老いの豊かさ》	青木やよひ	シンポジウム	今江 祥智	尾埜 善司	(財)ロマン・ロラン研究所設立三十周年記念	神谷 郁代	ベートーヴェンを弾く	神谷 郁代

12・21	ロマン・ロランとヴィクトル・ユゴー	二〇〇四	『きょう』を読む『京都、半鐘山の鐘よ 鳴れ!』
	ディディエ・シッシユ	5・29	朗読とおはなしの会
二〇〇二			
4・20	ロマン・ロラン記念スプリングコンサート ヴァイオリン演奏…ピエール・イワノヴィッチ ピアノ伴奏…郁子・イワノヴィッチ	7・16	おはなし 尾埜 善司 朗読 村田まち子 ロマン・ロラン記念サマーコンサート ヴァイオリン演奏…ピエール・イワノヴィッチ ピアノ伴奏…郁子・イワノヴィッチ
11・11	ロマン・ロランの後継者たち	9・11	抗日中国における中仏文化交流 中国の知識人はロマン・ロランをどのように評価したか
二〇〇三			
4・19	ロマン・ロラン記念スプリングコンサート ヴァイオリン演奏…ピエール・イワノヴィッチ ピアノ伴奏…郁子・イワノヴィッチ	二〇〇五	現代の法とヒューマニズム 加古二郎と瀧川事件
5・10	ロマン・ロランの作品による音楽とレコード	1・29	ロマン・ロラン没後六十年記念コンサート 梅原ひまり 神谷郁代デュオ
	尾埜 善司	6・12	ヴァイオリン演奏…梅原ひまり ピアノ演奏…神谷 郁代
5・31	戦争と平和、科学を考える ブリーモ・レーヴィを語る		生々発展する魂 ゲートとベートーヴェンそしてロマン・ロラン
	ジル・ド・ジェンヌ 解説 西成 勝好	6・25	
11・22	ロマン・ロランを読みながら 今の世界を考える		青木やよひ
	峯村 泰光		

10・29	交差する肖像	村田まち子・宮本エイ子
	ロマン・ロランとクロードル	中国研究を通しての日仏交流
	J・F・アンス	京大シノロジーの創始者狩野直喜の場合
	通訳 原口 研治	狩野 直禎
二〇〇六	戦間期ヨーロッパとロマン・ロラン	『ピエールとリュース』を演出して
11・24	山口 俊章	今藤政太郎
二〇〇七	日本におけるロマン・ロラン受容史	朗読の会
1・20	ディディエ・シツシユ	親子で読む・聴く『ジャン・クリストフ物語』
	通訳 シツシユ 由紀子	会員たち
	琴 笙 ヴァイオリンによる新春コンサート	中国におけるロマン・ロランの紹介者・傅雷
	大谷 祥子	榎本 泰子
	豊 剛秋・増永雄記	前理事長尾埜先生への感謝の会・記念講演
2・3	歌と朗読の会	ロマン・ロランと日本人たち
	歌…下郡 由	尾埜 善司
	「ピエールとリュース」朗読	ロマン・ロラン国際平和シンポジウム
	尾埜 善司 ほか 会員	宮本正清の詩「焼き殺されたいとし子らへ」
7・21	朗読の会	「わらい」朗読
	第一次世界大戦とロマン・ロラン	フランソワ・ラベット
	そして『母への手紙』	ロマン・ロランが愛したベートーヴェン
		ピアノ演奏…神谷 郁代

- 二〇〇九
2・7 朗読の会とピアノ演奏『ジャン・クリストフ物語』
ピアノ演奏…岩坂富美子
朗読…下郡 由ほか
- 6・13 『日本ロマン・ロランの友の会』六十周年記念
レクチャー・ギターコンサート 西垣 正信
フー・ツォン ピアノリサイタル
犠牲の宗教への問い 高橋 哲哉
- 10・24
二〇一〇
7・24 小林多喜二とロマン・ロラン——反戦・国際主義
の文学を求めて エヴリン・オドリ
- 9・29—10・3
一九五三年のフランスの子供の絵特別出品（京
都市幼児・児童・生徒作品展及び姉妹都市交歓
作品展）
- 10・9 ピアノリサイタル 神谷 郁代
- 二〇一一
2・19 朗読の会 トルストイ没後一〇〇年記念『トルス
トイの生涯』『伯爵様』 会員たち
- 二〇一一
11・19 フロイトとロラン——災厄の後に、幻想の前で
小森謙一郎
- 二〇一二
1・27 『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念会
小尾俊人氏へのオマージュを込めて——京都会場
講演『ジャン・クリストフ』を読みかえして 村上 光彦
- ロマン・ロランとみず書房と小尾俊人さん 守田 省吾
- スピーチ フィリップ・ジャンヴィエ・カミヤマ
朗読の会
女たちの祭典・ワークシヨップ『魅せられたる魂』
アンネットとシルヴィ 会員たち
- 3・29 『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念会
小尾俊人氏へのオマージュを込めて——東京会場
琴とヴァイオリン合奏
琴…大谷 祥子 ヴァイオリン…白須 今
『春の海』 宮城道雄 作曲
『夢のあと』 フォーレ 作曲

7・28

朗読の会『魅せられたる魂』

アンネットとシルヴィ

二〇一四
9・26

シター演奏と朗読

於 ロマン・ロラン研究所

シター演奏

中川 啓子

10・20

ロマン・ロランと賀川豊彦

濱田 陽

二〇一三

6・22

ヴィヴェーカーナンド生誕一五〇周年記念

スワームー・ヴィヴェーカーナンドの生涯と

メッセージ

スワームー・サティヤローカーナンド

7・6

〈朗読とピアノ〉 オマージュ宮本正清

〈朗読〉『戦時の日記』『ジャン・クリストフ物語』

詩集『焼き殺されたいとし子らへ』

朗読 会員たち

〈ピアノ〉

岡田 真季

作曲 ポール・デュパン

曲目 『ジャン・クリストフ』

11・16

世界遺産ヴェズレー ロマネスク芸術の宝庫

アンドレ・アンジェイ・グルシエフスキ

二〇一五

9・19

戦後七〇年と憲法九条の意義

曾我部真裕

11・28

ロマン・ロラン〈聞き手として〉証人として

『ヴェズレー日記（一九三八—一九四四）』をめぐ

る考察

デイデイエ・シツシュ

通訳 シツシュ 由紀子

二〇一五年度 賛助会員、寄付者名簿 (アルファベット順・敬称略) *特別会員及同等寄付者

安倍 道子	有馬通志子	シッシュ・D・由紀子
福田 幸子	福田 由美	古家 和雄 古田 武司
権 英子	五島 清子	長谷川和宏 *長谷川治清
早川工務店(早川 友二)	濱田 陽 林	次郎
林 千恵子	日野二三代	本郷美智子 位田 隆一
池垣 勇	今井 香子	今西 良枝
*稲畑産業株式会社(稲畑 勝雄)		石田 秀
石川 梢一 *伊藤 朝子	井土 真杉	井上 幸子
岩坪嘉能子	神谷 郁代	狩野 直禎 加藤 澄子
加藤富美子	河合 綾子	久保 久子 木下 洋美
清原 章夫	黒柳 大造	松田有美子 峯村 泰光
*宮本エイ子	森本 達雄	森内富美子 *森内依理子
守田 省吾	村上 葉	室谷 篤男 村田まち子
村山香代子	永易 秀夫	永田 和子 中村 信子
中田 裕子	西村 秀美	西村七兵衛 *西成 勝好
西尾 順子	野村 庄吾	乗金 瑞穂 能田由紀子
岡部 素行	大川起示子	岡山 善政 沖本ひとみ
奥村 一彦	奥村 令子	*小尾 眞 折田 忠温

大谷 暢順	大谷 祥子	ロマン・ライフ(河内誠二)
坂井 昇	*酒井 保子	坂谷 千歳 佐久間啓子
佐々木雅子	志賀 鍊三	下郡 将宏 下郡 由
所司 育代	園部 逸夫	鈴木 明子 田間 千晶
谷口 景子	谷口 良則	田代 輝子 田谷 昭夫
徳永 勲保	東野 孝人	月ヶ洞晶子 上原 栄子
植松 晃一	上西 妙子	馬木 絃子 梅田 菊代
梅原 ふさ	氏家 玲子	和田 義之 八木美佐子
安木由美子	山口 俊洋	山口 千鶴 山本 和枝
山下 雅子	柳父 閑近	柳田 基

寄贈図書

フランス ロマン・ロラン協会

- 1、冊子 *Cahiers de Brève* no 35, 36
- 2、Romain Rolland et Georges Duhamel, *Correspondance*
(1912-1942) Paris Classiques Garnier

『ユニテ』編集を終えて

『ユニテ』43号を今年も無事にお手元へお送りすることができ、嬉しく思います。

この一年も日本で世界でさまざまな課題が表立ってきました。「なんとも大変なタイミングにあたってしまったが」に始まる曾我部真裕先生による講演「戦後七〇年と憲法九条の意義」が開かれたのは、多くの市民の「戦争反対・憲法守れ」の声を無視して安倍政権により進められた安全保障関連法案が未明に可決された、その日のことでした。そんなときに、憲法学者として冷静に分析された先生の言葉は、法と政治と私たち一人一人の立場の関係をどう折り合わせていくかを問うています。

『ヴェズレー日記』のロランには、そういう心の揺れが見え隠れしているようです。第二次大戦下、「反戦・平和」を訴えるといっても、そこには政治的な判断と、他者や他国、ひいては人類を尊重する立場とを個人の中でどう折り合わせるかがいかに困難かを、この『日記』は教えています。現在ヨーロッパを席卷している難民問題やテロに対しても、安易に白黒つけるのではなく、ロランと共に悩みながら、じっくり考えていきたいものです。今後ともご支援、よろしく願います。（守田省吾）

読書会報告

例会、原則第四土曜日 午後二時～四時

於 ロマン・ロラン研究所

二〇一五年、四月二五日、五月二三日、六月二七日、七月二五日、一〇月二四日、一二月二六日。

二〇一六年、一月三〇日、二月二七日、三月二六日、以上九回。三三六回、友の会から数えると五一一回終了。テクストは、『ロマン・ロラン伝』ベルナル・デュシャトレ著。戯曲「愛と死の戯れ」「狼」

通年 参加総数一二七人

編集部

守田 省吾 野村 庄吾
中田 裕子 西村七兵衛
宮本エイ子 清原 章夫
シッシユ・由紀子

en 1935: il était en effet, dans cet entretien, mais aussi par des lettres, intervenu en faveur de Victor Serge, un intellectuel soviétique francophone (né en Belgique), qui avait participé à la Révolution russe et qui ensuite, comme trotskiste et opposant au stalinisme, avait été exilé dans l'Oural. Grâce à l'intervention de Rolland et aussi grâce à une campagne internationale en sa faveur, Staline accepta de le libérer, et de l'expulser en 1936; mais je crois que c'est à partir de cette affaire que Rolland a commencé à se méfier du stalinisme, sans toutefois le dire ouvertement (contrairement, par exemple, à un André Gide qui en 1936 a publié son *Retour de l'URSS* qui a scandalisé les communistes). Si Rolland au départ n'a pas exprimé publiquement sa déception, c'est sans doute pour des raisons personnelles que j'ai évoquées; mais c'est aussi parce qu'il ne voulait pas faire le jeu des ennemis de l'Union soviétique, qui étaient alors en premier lieu les fascistes. Quand le pacte germano-soviétique a été conclu, c'est à son journal que Rolland a confié son malaise et sa colère; il a compris que quand on veut rester intellectuellement droit, on ne peut pas faire un bon militant. Un authentique intellectuel est toujours trop fin, trop nuancé, trop honnête et parfois trop indécis pour être utilisable par un parti politique. Bref, la place d'un intellectuel est toujours plus ou moins en coulisses: il ne peut pas jouer de rôle vraiment déterminant, et c'est peut-être ce qui a rendu Romain Rolland mélancolique.

Autre question posée par ce journal, et qui fait toute son actualité: comment concilier idéalisme et pragmatisme ? Que faire lorsqu'on a cru toute sa vie à une paix fondée sur la bonne volonté des nations, et que l'on s'aperçoit que l'une de ces nations est devenue folle ? Il y a les ultras du pacifisme, qui pensent que tout est préférable à la guerre, et il y a ceux comme Rolland qui considèrent cette attitude comme périlleuse et suicidaire. Être pacifiste, c'est refuser de s'enfermer dans la catégorie ami-ennemi. Certes, un tel refus est honorable. Mais que faire, si l'une des deux parties en présence s'entête à considérer l'autre comme hostile ? En somme, le «pacifiste» Romain Rolland a bien perçu les limites du pacifisme intégral, et c'est, entre autres choses, ce qui rend son journal si intéressant pour un lecteur d'aujourd'hui.

jamais redonné sa confiance à Staline, même après l'entrée de la Russie en guerre; et par ailleurs il hait ce qu'il considère comme la ploutocratie américaine. Il est donc dégoûté de tout: «On est dégoûté de la politique et des hommes. Ils sont incurables», écrit-il en janvier 1941 (p.539).

Cela le conduit à se raccrocher à de vieux rêves qui n'ont pas grand rapport avec la réalité d'alors.

Pour conclure: l'amitié comme seul recours

Rolland a donc fait toutes sortes de rencontres, il a assisté à beaucoup d'événements, mais cette fois, l'idéalisme a, je crois, bridé ses engagements. De là l'impression d'une certaine tristesse que dégage son journal. Bien sûr, ce non-engagement tient peut-être à son âge; il tient aussi à des circonstances personnelles: par exemple il aurait pu rendre publique sa condamnation de la politique stalinienne en 1939, mais s'il ne l'a pas fait, c'est parce que le fils de sa femme était en Russie et qu'il craignait des représailles. Mais enfin, on a vraiment l'impression d'un intellectuel désabusé et qui sait qu'il n'a pas de prise sur les événements de son temps.

Que lui reste-t-il dans de telles circonstances ? Les joies de l'amitié grâce aux retrouvailles avec Paul Claudel, qui a été son camarade à Louis-le-Grand. Rolland a renoué au bout de cinquante ans avec Claudel, si différent de lui. Les pages consacrées dans ce journal à ses rencontres avec Claudel sont très émouvantes. Elles sont aussi très riches d'enseignement, parce que les dialogues entre ces deux vieux amis n'évitent aucun sujet, et parce que Rolland retranscrit presque à chaud beaucoup de paroles de Claudel. On y apprend ainsi, dans un passage en date du 28 juin 1942 (p.810-817) et qui évoque une visite de Claudel, que ce dernier déteste les Allemands et méprise cordialement le maréchal Pétain:

«Pétain, dit-il, je lui cracherais au visage !» - Vieil hypocrite. Passe pour dévot, et ne croit à rien. Vante la famille, et est deux ou trois fois divorcé, et ne peut pas souffrir les enfants.»

Tout y passe: Mussolini (*cette fripouille, cet imbécile*), des écrivains: Suarès, que Claudel estime peu, Péguy, pour qui il n'a aucune sympathie. Il est question, plus généralement, de ses goûts littéraires et musicaux (Virgile, qu'il adore, Beethoven), de l'attitude de l'Eglise, que Claudel juge pusillanime alors qu'il a, lui, notamment, écrit au grand rabbin pour lui dire son soutien. Claudel y apparaît comme très libre et courageux. La religion occupe aussi une grande place dans ces échanges, puisque Rolland envie Claudel:

«Je lui dis la chance qu'il a eue d'être visité par la grâce, à Notre-Dame.» (p.813)

Rolland voudrait lui aussi avoir la foi, il cherche une transcendance, et on sent une profonde admiration de sa part pour Claudel qui, lui, croit sans le moindre doute, et qui est persuadé «*qu'après sa mort il verra Dieu en face.*» (p.812)

Claudel ne parviendra jamais à convertir Rolland, mais dix ans après sa mort, en 1954 donc, Claudel rendra un émouvant hommage à *cette grande âme, qui n'était que foi et espérance*.

Alors, pourquoi lire ce journal ? Quel intérêt peut-on lui trouver aujourd'hui ?

D'abord, cela permet de comprendre les limites qui bornent le pouvoir des intellectuels. Romain Rolland est quelqu'un que l'on peut éventuellement, dans le meilleur des cas, consulter; mais si son avis n'est pas conforme à la ligne du Parti (dans le cas des communistes), on ne l'écouterait guère. Et je crois que si ces pages sont empreintes d'une certaine mélancolie, c'est que Rolland a profondément ressenti cela. À mon avis, il a eu sa première déception quand il a vu de près la réalité de la Russie soviétique. J'ai rappelé plus haut que Rolland avait rencontré Staline

notre civilisation le cancer de l'Argent asservisseur et corrompeur que nos démocraties n'auraient jamais eu l'énergie d'opérer, car elles se sont laissé infecter jusqu'aux moelles.》 (p.475.) Ce n'est qu'un bref passage de ce journal, mais tout de même, il faut reconnaître que cela a bien été écrit.

Cela dit, ne jetons pas la pierre à Rolland. D'abord parce que le plus souvent, il prend soin de spécifier que l'Allemagne qu'il aime, ce n'est pas l'Allemagne nazie, c'est l'Allemagne de toujours: 《Nous sommes une poignée à séparer les peuples des crimes ou des folies de tels de leurs chefs, et à continuer à croire en la fraternité des hommes.》 (p.583, 11 avril 1941)

Ensuite parce que surtout, sur le fond des choses, et en fonction de ses convictions les plus profondes, Rolland ne pouvait pas soutenir des régimes tels que celui des nazis ou que celui de Vichy.

Quand le gouvernement de Vichy est formé, il ne tarde pas à manifester sa méfiance, par le zèle que montre Vichy à capituler devant toutes les exigences de l'Allemagne, et aussi par la hâte avec laquelle Vichy décide de juger les 《responsables》 de la défaite. À la date du 30 juillet 1940, Rolland évoque un 《décret criminel》 de Vichy frappant arbitrairement 《tout Français ayant quitté la France entre le 10 mai et le 30 juin》: il parle à ce propos de 《monstrueux arbitraire》 (p.466). En septembre 1940, il parle avec dégoût des 《sinistres décrets》 du gouvernement de Vichy (ceux du 6 septembre, qui prévoient de priver certains juifs de la nationalité française) (p.488). Il évoque avec le même dégoût ce qu'il découvre dans la presse collaborationniste: 《Abominables articles antisémites dans le dernier numéro de *La Gerbe*. (...) — Déshonorant pour Châteaubriant. J'en suis profondément attristé et révolté.》 (p.502, 9 octobre 1940) Il s'indigne aussi du statut des juifs promulgué en juin 1941 (p.627).

Donc aucune confiance pour Vichy; peu d'estime pour la personne même du maréchal Pétain, que Châteaubriant lui a décrit comme 《brave homme, honnête mais faible, enfantin, puéril, réjouit de sa dignité, de sa popularité, adorant les réceptions qu'on lui fait dans les villes, dénué de toute expérience politique, un vieux rond-de-cuir de l'École de guerre...》 (p.531, 26 décembre 1940)

Et pourtant, il ne se rallie pas non plus à la Résistance: pour lui, de Gaulle et ceux qu'il appelle curieusement les *Degaullistes* sont des fanatiques. Au moment où de Gaulle a sans succès tenté de prendre la base de Dakar, restée finalement fidèle à Vichy, Rolland le juge sévèrement: 《Je reconnais l'esprit de parti enragé des fanatiques français, à travers les âges.》 (p.493, 23 septembre 1940) Ailleurs, il parle du *fanatisme orgueilleux* de de Gaulle (p.514), il considère ce dernier comme un insensé qui prépare la guerre civile. Rolland voit de Gaulle comme un officier maurassien, loin du peuple et à qui il ne peut pas faire confiance. Et ce ne sont pas les amis communistes de Rolland, notamment Aragon qui considère de Gaulle comme *un imbécile, un Mac-Mahon*, (p.1084, 14 novembre 1944), qui lui permettront de changer d'avis à ce sujet.

Ni Pétain, ni de Gaulle: 《Les Français de Londres soulèvent quotidiennement les Français de France contre le gouvernement de Vichy. — Et tous, Londres, Paris, Vichy, célèbrent Jeanne d'Arc, dont la fête est dimanche 11. Chacun la veut pour sienne, contre l'autre. Les Anglais, les Allemands la revendiquent. Et Vichy lui compare le maréchal Pétain. — Mais, dans *La Gerbe* de Châteaubriant, le fils de Péguy, Marcel, prêche la collaboration avec l'Allemagne et célèbre celle-ci comme la vraie nation chrétienne ! La poussière de Péguy, le père, doit en fumer de rage dans la terre qui a bu son sang, près de la Marne.》 (p.601, 10 mai 1941)

Donc on peut dire que Rolland a quelque peu 《raté le coche》. Il n'a cru en personne: il n'a

une amitié vraie à une idée !» (19 mai 1942, p.775) Fidélité donc, et tolérance extrême qui va jusqu'à la naïveté chez Rolland, puisque, toujours dans le texte évoquant la visite de Châteaubriant en février 1940, Rolland dit - et cela aujourd'hui nous choque: «Je ne juge point. Je note. – Mais je ne doute point que si Château s'est laissé ensorceler, il n'a point vu beaucoup plus faux que ceux qui, de France, ne voient de l'hitlérisme que l'aspect haïssable et méprisable. Les deux sont faux. Les deux sont vrais.» (p.329)

Déclaration étrange et qui nous met mal à l'aise. Est-ce à dire que pour Rolland, l'hitlérisme puisse avoir un aspect qui ne soit pas haïssable ou méprisable ? Poser cette question me permet justement de passer à la deuxième partie de mon exposé: Romain Rolland sous l'occupation, au moment où son sens de la nuance, poussé à l'extrême, l'amène à une certaine forme de paralysie et même de négativisme qui, disons-le franchement, a quelque chose de décevant.

II. Romain Rolland, Pétain et la guerre.

Il sera donc toujours un isolé, parce qu'il est trop nuancé: «Pour les "pacifistes intégraux", devenus "collaborationnistes", je suis un stalinien, anti-allemand. Pour les *arrabiati* anti-allemands, je suis un pro-allemand, car j'ai reçu beaucoup d'Allemands dans ma maison. Ne doutons pas que, pour des bourgeois qui se souviennent de l'autre guerre, je ne sois encore un pacifiste, gandhiste, un sans-patrie ! Allez vous y reconnaître !» (1943, p.936)

Est-ce à dire qu'il ait toujours eu raison ? Non, car c'est aussi parfois un grand naïf. Le problème de la solitude intellectuelle de Rolland, c'est cela: avoir eu raison avant la guerre, mais une fois la France occupée, perdre, plus ou moins, la conscience des réalités, au point de s'enfermer dans d'étranges rêveries.

Il faut d'abord rappeler que juin 1940 a été un moment très brutal et traumatisant pour tous les Français, qui ont vu leur pays envahi et mis à genoux par l'Allemagne hitlérienne. Le *Journal de Vézelay* est rempli des échos de cette douloureuse actualité: Rolland a vu l'exode, avec les réfugiés fuyant l'avance allemande. Lui se refuse à fuir, et le 24 juin lui parvient la rumeur de l'Armistice, signé deux jours plus tôt. (p.442)

Comment se comporter face à l'Allemagne triomphante, et comment contribuer au relèvement de la France ? On est parfois gêné quand on lit Rolland car il lui arrive de se contredire, et de prendre parfois des positions qui nous choquent. On dirait qu'il est déboussolé - comme l'est d'ailleurs le pays tout entier. Cependant, il ne faut pas oublier que ce n'est pas un texte suivi, que ce n'est pas un exposé doctrinal: ce n'est qu'un journal, dans lequel s'écrit une pensée qui se cherche.

Alors bien sûr, certaines pages de ce journal, écrites au début de l'occupation, ne sont pas toujours à l'avantage de Rolland.

Il faut se souvenir qu'il a toujours été un grand admirateur de l'Allemagne et de sa culture, de sorte que l'idée de collaboration entre la France et l'Allemagne ne lui paraît pas du tout absurde. Il dit même, en mars 1941, que «l'idée en soi est bonne et devrait être réalisée si l'on était de part et d'autre, en esprit sincère de collaboration.» (p.564) Collaborer avec l'Allemagne, ce serait un moyen de construire une Europe capable de s'opposer à l'hégémonie américaine. «Certes j'aurais cent fois plus d'aversion et d'horreur pour une domination de la terre par la dure Amérique que par l'Allemagne !» (p.558) Il va même encore plus loin, quand il écrit: «... l'Allemagne d'Hitler travaille à forger les États-Unis de l'Europe et du monde, et elle extirpe de

donnerai deux exemples: d'abord Jean-Richard Bloch (1884-1947), agrégé d'histoire et romancier; celui-ci a connu l'horreur de la première guerre mondiale, et dès 1919 s'est rapproché de Romain Rolland, puis dans les années trente a soutenu l'URSS contre le fascisme. Or quand il y a eu le pacte germano-soviétique il a plus ou moins essayé de justifier la position russe en disant que la faute était celle des démocraties occidentales qui, se méfiant de Staline, l'avaient poussé dans les bras de l'Allemagne. Il y a eu aussi Aragon, grand poète, apprécié par Rolland, et qui, fidèle à la discipline dictée par le Parti Communiste, a d'abord refusé de condamner le pacte germano-soviétique (mais qui deviendra finalement l'un des grands poètes de la Résistance): «Jean-Richard Bloch et Aragon s'obstinent absurdement à soutenir la légitimité du pacte germano-russe.» (p.254) Du coup, Rolland s'est éloigné de la ligne du Parti communiste.

En somme, Romain Rolland est un homme qui sait rester indépendant de ses amitiés politiques, et qui même n'hésite pas à se lier ou plutôt à conserver des liens avec des gens de l'autre bord, comme Alphonse de Châteaubriant. Cette amitié assez étrange entre Rolland et Châteaubriant est en effet l'un des points les plus curieux de ce journal: elle révèle chez Rolland une grande capacité à nouer des liens et à les maintenir par-dessus les clivages politiques. Rolland et Châteaubriant sont amis depuis les années 1910. Châteaubriant est né en 1877, il est donc plus jeune que Rolland; et c'est un romancier à succès, auteur de romans ancrés dans le terroir; mais il a viré à l'extrême droite nationaliste dans les années vingt, et il est finalement devenu dans les années trente un admirateur frénétique du nazisme, dans lequel il a cru voir une forme nouvelle de mysticisme. Il s'est plusieurs fois rendu Allemagne et a même été reçu personnellement par Hitler avant la guerre. Il a raconté à Rolland cette rencontre, récit que Rolland reprend à la p.325, à l'occasion de la visite de Châteaubriant à Rolland en février 1940. Châteaubriant est donc allé rendre visite à Hitler dans sa maison de Berchtesgaden, il a discuté personnellement avec lui de questions religieuses (puisque Châteaubriant voyait dans le nazisme le prolongement du christianisme médiéval); Hitler lui a répondu en parlant de questions économiques; et Châteaubriant a déclaré à Hitler que «... pour fonder une nouvelle Allemagne, (...) il faut aussi le spirituel, le religieux et l'héroïque; il faut ressusciter l'esprit. – À ces paroles, la figure d'Hitler se transforme (...). Ses yeux s'éclairent, il change de manières, il prend la main de Châteaubriant, - et le fixant de très près dans les yeux, il lui dit – «je vous aime ! ...».

Châteaubriant raconte tout cela à Rolland qui ne lui en veut pas, mais qui a l'air de le considérer comme un grand naïf: le surnom de *Château* que lui donne Rolland, révèle, à mon sens, une sorte de sympathie émue, d'indulgence même face à un comportement considéré comme une sorte d'enfantillage.

En 1940, avec un soutien financier allemand, Châteaubriant crée une revue: *La Gerbe*, qui plaide pour la collaboration avec l'Allemagne. Si bien qu'à la fin de la guerre, Châteaubriant s'enfuit en Allemagne, puis s'installera en Autriche, où il mourra en 1951. Cela n'empêche pas Rolland de lui témoigner une mansuétude qui étonne. À l'occasion de la visite de Châteaubriant, Rolland lui parle justement des exactions commises par le nazisme: des violences antisémites, des brutalités, des tortures à Dachau, etc. (p.328) Son interlocuteur ne veut pas voir ces réalités ou bien, de manière fort peu convaincante, tâche d'innocenter les responsables nazis. Pourtant Rolland ne lui en veut pas. Au contraire, avec beaucoup de relativisme et en mettant à distance ses propres engagements, il essaie de se montrer compréhensif avec cet ami qu'il juge, en fin de compte, excessivement idéaliste. Il dira d'ailleurs plus loin, dans son journal, en réponse à ceux qui lui reprochent cette amitié avec Châteaubriant: «Je ne suis pas de ceux qui sacrifieront jamais

Quand il s'agit d'une guerre de conquête, d'impérialisme, d'une guerre pour un territoire ou pour la puissance, Rolland en perçoit toute l'absurdité et la combat: c'était le cas de la première guerre mondiale. Par contre, quand ce sont des principes qui sont en jeu, la guerre est parfois inévitable, et on ne peut pas dire: la paix à tout prix.

Les communistes ensuite. Rolland est depuis le début des années trente un compagnon de route du PC. Il a soutenu activement l'URSS, écrivant par exemple, en 1935, dans un texte intitulé *Par la Révolution, la Paix*:

«Nous estimons, nous, que l'URSS a fait, depuis dix ans, une expérience sociale grandiose et douloureuse – dont le succès est encore incertain – mais qui est l'unique effort puissant de la vieille Europe pour créer un monde nouveau.»

Et Romain Rolland, on le sait, est allé en URSS et s'est entretenu avec Staline, même si cet entretien a commencé à lui ouvrir les yeux sur la nature du stalinisme.

D'où les liens qu'il a eus avec le Parti communiste français, dont la raison d'être même, depuis le congrès de Tours de 1920, c'est de soutenir l'Union soviétique.

Il reçoit ainsi à Vézelay la visite de figures importantes du Parti communiste: le 5 août 1938 Maurice Thorez, qui dirige le Parti depuis 1930: «Surtout Thorez m'est sympathique; sa grosse face de petit garçon grandi trop vite est écarlate du soleil d'août» (p.67); des intellectuels, aussi, comme Aragon, grand poète passé du surréalisme au communisme, qui vient le voir en juillet 1938 (p.56) et qu'il retrouve à Paris en octobre de la même année (p.130), et surtout Jean-Richard Bloch, qui en 1938 lui écrit avant de venir s'entretenir avec lui le 13 octobre de la même année, et que Rolland revoit en juillet 1939 (p.231): deux figures dont je parlerai plus en détail un peu plus bas.

Il y a cependant un problème. La gauche, ou plutôt la gauche communiste, à la fin des années trente et au début des années quarante, est travaillée par des hésitations sur l'attitude à prendre. Pourquoi ? Parce que si elle a toujours affirmé sa solidarité avec l'URSS, qui semblait être le plus efficace rempart contre le fascisme, la politique retorse et machiavélique de Staline la met de plus en plus mal à l'aise. En septembre 1938 – plus précisément le 11-, recevant à Vézelay Léon Moussinac, journaliste communiste et critique cinématographique au journal communiste *L'Humanité*, Romain Rolland rappelle clairement (p.95) que la lutte contre les fascismes est une *cause commune*, et quelques pages plus loin (p.98) que les ennemis de la Russie seraient prêts, pour la détruire, à soutenir Hitler et Mussolini. En somme il voit dans la Russie le seul allié fiable contre les fascismes. Mais en 1939, les choses changent parce que Staline signe en août un pacte de non-agression avec Hitler, ce qui permet à la Russie, quand Hitler envahit la Pologne en 1939, de mettre la main sur toute la moitié est de la Pologne. Romain Rolland est alors révolté. Il écrit en février 1940 (p.316 sqq.): «Je suis submergé de dégoût par le Mensonge qui a infecté jusqu'à la moelle la pensée politique de toute l'Europe... On ne sait plus qui ment le plus. Mais tout est mensonge. Et en quelques mois (en quelques jours), celui de l'URSS dépasse en perfidie, en effronterie, celui de Goebbels et d'Hitler. ... Mon cœur bondit en moi d'indignation. Car qui, mieux que moi, sait que c'est l'URSS qui, depuis cinq ans et plus, souffle la haine en France contre Hitler, mène la croisade contre lui, nous a sans cesse excités à dénoncer la menace allemande, à sonner le réveil et le rassemblement des forces démocratiques ! ... (Le Kremlin) aide l'Allemagne à massacrer la Pologne en s'en faisant donner un morceau ...»

En prenant cette position, Rolland n'ignore pas qu'il est isolé, car il a des amitiés solides parmi de jeunes intellectuels ou écrivains communistes qui, eux, s'obligent à des contorsions. Je

Destin !» (p.98)

L'idée de Rolland, c'est qu'il ne faut pas, au nom du principe *la paix à tout prix*, capituler devant lui. C'est pourquoi il écrit, très lucidement, que la paix de Munich est une *fausse paix* (p.120). Mais en s'exprimant de la sorte, il se fait des ennemis. De là sa rupture avec ceux qu'il appelle les *pacifistes intégraux* (p.96), dont une figure importante est Georges Pioch, celui qu'il appelle mon *ex-ami*, (p.96), et qui dans le journal pacifiste *L'Intransigeant*, écrit ceci (que cite Rolland en septembre 1938) : «Romain Rolland qui, depuis qu'il n'est plus mobilisable, accepte le cœur joyeux de provoquer la mêlée.» (p.97) Georges Pioch, par pacifisme, finira, d'ailleurs, après 1940, par prôner la collaboration avec l'Allemagne. Rolland, lui, a la lucidité de comprendre et d'expliquer ce qui le sépare de ces pacifistes fanatiques :

«En fin de compte, il n'y a entre eux (ceux d'entre eux qui sont sincères) et nous qu'une différence d'appréciation sur le meilleur mode de défendre la paix. Nous sommes convaincus qu'une attitude digne et ferme en face d'Hitler est seule capable de la maintenir. Eux, pensent qu'il faut faire concessions sur concessions. Je crois qu'ils se trompent terriblement. – Mais il n'y aurait point là de quoi s'insulter réciproquement ! Et je m'y suis toujours refusé. Quelle frénésie s'est emparée des esprits, pour qu'ils outragent et qu'ils déchirent, du jour au lendemain, leurs vieux amis ! – Que l'avenir nous juge !» (p.97)

On sent là une certaine amertume de Rolland, désolé de voir que l'incompréhension des pacifistes les plus convaincus amène ces derniers à l'insulter. L'histoire *a posteriori* donne raison à Rolland. Et d'ailleurs, quand la guerre éclate en septembre 1939, il écrit : «Il est clair qu'il ne reste plus d'autre parti à prendre, et que la paix ne peut plus revenir en Europe, avant que Hitler soit brisé et le gouvernement nazi extirpé d'Allemagne.» (p.257, 2 septembre 1939)

Dans ces pacifistes, il y a des écrivains: Giono et Alain.

Giono, d'abord, grand écrivain du terroir provençal, qui en 1938 désigne Rolland par une expression injurieuse: *feu Romain Rolland* («je me vois grossièrement insulté par Jean Giono», dit Rolland p.137, en découvrant cela); et cette attitude lui paraît être d'une désolante naïveté:

«... qu'un Giono ne s' imagine pas que, même au cas d'entrée d'Hitler en France sans résistance, son renoncement le sauvera (...). Le pacifiste est par Hitler haï et poursuivi, à l'égal du communiste.» (18 septembre 1938, p.102-103) Et on sait que Giono finira par soutenir Vichy.

A côté de Giono, il y a aussi Alain: «Les «pacifistes intégraux», comme Giono, Alain, etc. (...), les «conseillers de la peur», comme dit Nizan. Par là, ils ont servi, à leur insu, le bluff fasciste de l'Allemagne et de l'Italie...» (p.132, novembre 1938)

«Depuis vingt ans, j'étais fait à la frénésie des partis de droite, Action française, etc. Mais depuis deux ans, je découvre que les pacifistes, les non-résistants, les «gandhistes» français (pauvre Gandhi !), ne leur sont nullement inférieurs en haine, injure et méchanceté.» (p.137, novembre 1938)

C'est évidemment très actuel, quand on pense aux événements survenus à Paris en 2015: face à un ennemi qui veut notre mort et dont la perversité est évidente, que faire ? Continuer à tenir un discours de paix ? Ou bien se décider enfin à nommer l'ennemi ? Et une fois qu'on l'a nommé, tout mettre en œuvre pour le détruire ? La nécessité de détruire Hitler est pour Rolland une évidence: «Hitler, pour qui j'ai manifesté mon inimitié et la nécessité de sa destruction», écrit-il le 30 avril 1940 (p.393).

Le malentendu entre Rolland et les *pacifistes intégraux* est pourtant facile à comprendre.

publique. Le résultat de ces menées antirépublicaines, ce sera l'instauration du régime de Vichy, à la faveur de la défaite de 1940. Période éprouvante pour Rolland, puisque Vichy va mettre en place une politique de collaboration avec l'Allemagne nazie, dont le régime le révulse – lui qui par ailleurs a toujours cru en une entente entre les peuples allemand et français pour construire une Europe unie.

Ce qui est donc intéressant, c'est de voir comment Rolland, qui n'est pas jeune et qui reste une grande conscience de gauche, a réagi par rapport à ces événements. Pour des raisons difficiles à déterminer (par prudence, ou par ce qu'il ne se sent pas à l'aise), il est resté en retrait. Mais ce journal, parce qu'il n'était pas destiné à la publication, lui permet de dire assez clairement ce qu'il pense sans risquer la censure.

L'important, c'est de voir que grâce à ce journal, on accède à la connaissance d'un «autre» Romain Rolland. Du fait de son engagement *au-dessus de la mêlée* pendant la première guerre mondiale, on était habitué à le considérer comme le type même de l'intellectuel pacifiste. Or là, dans un contexte historique tout à fait différent, on voit que ce n'est pas un pacifiste à tout prix, et que face à une situation internationale différente, et face à une guerre de nature différente, il est amené à des prises de positions qui peuvent surprendre.

I. La solitude du confident.

Romain Rolland est vu comme une sorte de grande conscience de la gauche intellectuelle, et d'ailleurs il se réclame du parti communiste, mais son aura dépasse largement le cercle des communistes: des gens de toutes obédiences se réclament de lui. Donc on vient le voir à Vézelay, quelquefois il va à Paris; et son journal témoigne de ces visites et de ces entretiens multiples. De plus, grâce à son âge, il se sent plus libre, et cela lui donne dans ses prises de position une liberté de parole que les autres n'ont pas toujours.

Cela dit, l'impression que je ressens en lisant dans le *Journal* le compte-rendu de toutes ces rencontres, c'est celle d'une grande solitude. C'est là le paradoxe: Romain Rolland est très entouré et souvent consulté, mais finalement il est toujours seul.

Seul parce que parmi ses disciples il y a ceux qui ne le comprennent plus: les pacifistes dont finalement certains, par refus de toute guerre, vont tomber dans l'acceptation de la collaboration avec l'Allemagne; et les communistes, dont les arrière-pensées politiques sont commandées par le soutien à l'URSS.

Les pacifistes, d'abord. Depuis la première guerre mondiale, lorsqu'il écrivait en 1914 *Au-dessus de la mêlée*, face à ce carnage de 14-18 qui était suicidaire pour l'Europe, le nom de Rolland était en effet synonyme de pacifisme. Mais dans les années trente, quand il voit le danger mortel que représente le progrès du nazisme en Europe, il conclut que face à Hitler il ne faut pas prôner l'apaisement, mais qu'il faut au contraire se montrer ferme. Septembre 1938 est un moment important: Hitler s'en prend à la Tchécoslovaquie et l'Europe est de ce fait au bord de la guerre. On sait que le Président du Conseil: Daladier, et l'Anglais Chamberlain, qui a toujours prôné l'apaisement face à l'Allemagne, vont finir par signer avec Hitler les accords de Munich, qui sont en fait une capitulation. Les pacifistes purs et durs, qui se réclament en particulier de Rolland, approuvent cette politique. Mais Rolland, lui, n'est pas d'accord avec eux. Il a toujours pensé, en effet, que Hitler était un fou, il l'appelle *le dément de Bechstesgaden* (p.91), il dit: «La paix du monde, le meurtre du monde, sont dans les mains de cet insensé, qui se croit l'homme du

Romain Rolland, confident et témoin Quelques réflexions sur le *Journal de Vézelay* (1938-1944)

Didier Chiche

Romain Rolland a commencé à tenir son journal en 1882. En 1950, ce *Journal* a été donné à la BNF par la sœur et la veuve de Rolland, et certains morceaux, par la suite, en ont été publiés (je pense au *Journal des années de guerre: 1914-1919*). Cependant, il a fallu attendre 2012 pour que sorte, chez Bartillat, le journal des années 1938-1944 (Rolland est mort le 30 décembre 1944), dans une excellente édition due à Jean Lacoste avec la collaboration de Marie-Laure Prévost. Ce texte, paru sous le titre: *Journal de Vézelay 1938-1944* et accompagné d'une présentation, de notices et d'un index, est très instructif, et enrichit l'image que l'on a de Rolland. C'est à cette édition que je me réfère (notamment dans les notes mises entre parenthèses) pour nourrir ma réflexion sur ce journal.

Il s'agit un texte assez disparate: tantôt des notations jetées à la hâte sur le papier sans souci de cohérence, tantôt des textes plus longs et plus construits.

L'intérêt de ce journal, c'est que Rolland a assisté aux événements les plus dramatiques de l'histoire de l'Europe au XXe siècle, et en a été un spectateur plus ou moins engagé.

Âgé de 72 ans en 1938, il a cette année-là quitté la Suisse pour Vézelay, dans sa Bourgogne natale. Pourquoi ce déménagement ? Peut-être parce que le grand intellectuel de gauche qu'il a toujours été sent que la France menacée par les fascismes a besoin de lui. C'est ce qu'il écrit (cf. p.11 de l'édition du *Journal de Vézelay*) à son correspondant japonais Katayama en 1937: «Ma place est dans la France du Front populaire et d'autant plus qu'elle est menacée.» Et si finalement il a choisi Vézelay, c'est parce que ce n'est pas trop loin de sa ville natale de Clamecy, et que c'est un lieu qui a une valeur spirituelle importante: c'est ce qu'il dit aussi à Katayama: «cette colline sacrée pour tous les Français.» (p.12) Vézelay avec sa basilique dédiée à Marie-Madeleine, et où saint Bernard de Clairvaux a prêché la deuxième croisade (p.13).

Je viens de dire *intellectuel de gauche*: je profite de l'usage de cet expression pour en clarifier le sens. Qu'est-ce en effet qu'un *intellectuel* ? Ce mot a été utilisé à partir de l'affaire Dreyfus, lorsque des écrivains, des artistes, des gens dont l'activité était d'ordre littéraire ou artistique, ont suspendu la pratique de leur art pour descendre dans l'arène politique, au nom de principes supérieurs. Pour désigner les intellectuels, on emploie aussi le mot de *clercs*, qui à date plus ancienne désignait les hommes d'église. Et ce n'est pas sans raison: les intellectuels sont des directeurs de conscience laïcs, des écrivains ou des artistes engagés; engagés parallèlement à la pratique de leur art; ou bien engagés à travers leur art – comme cela a précisément été le cas de Rolland pendant toute sa vie d'écrivain.

Les années trente ont été les années de la montée des périls (prélude aux tragédies des années quarante): il y a eu en Allemagne l'accession du nazisme au pouvoir, la constitution d'une alliance entre l'Allemagne nazie et l'Italie fasciste, le renforcement de l'Allemagne nazie avec des coups de force qui ont commencé à démanteler le traité de Versailles (annexion de l'Autriche et démantèlement de la Tchécoslovaquie), et la guerre d'Espagne, entre 1936 et 1939, qui a eu pour conséquence l'installation en Espagne d'un régime fascisant, si bien que la France s'est retrouvé encerclée par des puissances fascistes. De plus, à l'intérieur même de la France se manifestait une tentation antirépublicaine et plus ou moins fascisante dans une partie de l'opinion

ユニテ

第四十三号

発行日

二〇一六年四月一五日

発行者

一般財団法人

ロマン・ロラン研究所

理事長 西成 勝好

京都市左京区銀閣寺前町三二

電話・FAX

(〇七五) 七七一―三二八一

郵便番号 六〇六一八四〇七

郵便振替振込口座番号

〇一〇五〇―九一五九九九六

印刷所

(株) 北斗プリント社

URL <http://www2u.biglobe.ne.jp/~rolland/>
E-mail rolland-miyamoto@mtf.biglobe.ne.jp

U N I T É

Sommaire

Romain Rolland, confident et témoin -Quelques réflexions sur *le Journal de Vézelay (1938-1944)* (traduction: Yukiko Chiche) Didier CHICHE

Le sens de l'article 9 de la Constitution au 70 ème anniversaire de la fin de la deuxième guerre mondiale Masahiro SOGABE

Jean de Saint-Prix, proche disciple de Romain Rolland Kōichi UEMATSU

Paris au lendemain des attentats Kazuhiro HASEGAWA

Compte-rendu des séances de lecture Akio KIYOHARA

Sujets divers

Compte rendu des activités de l'Institut Romain Rolland

Activités et objectifs de l'Institut Romain Rolland

Annuaire 2015 des membres et donateurs

Postface